
飛べない神様

大和伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛べない神様

【著者名】

大和伊織

209652

【あらすじ】

ごく普通に小学生最後の夏休みを楽しんでいた結だったが、目が覚めるとなぜか一面銀世界に放り出されていた。

ずぼ、ずぼつと間抜けな音が、ただ耳に届く。

歩くというよりは埋もれながら、結は雪の中をただひたすら歩いていた。吹雪いていないだけマシだが、そのようなことに感謝する余裕などなかつた。どこまでも吹き付ける冷たい風はノースリープに短パンという姿に容赦ない寒波を攻撃し続け、体力を奪つていつた。

歩き続けなければ死ぬ、そんな本能にも似た、やる気かもよく分からぬ衝動だけが結を動かしていた。

一体どこのへりに歩いただらう。そしてあとどれくらい歩けばいいのだろう。

それを考えてしまった瞬間、とうとう足が止まってしまった。もう一步も歩けない。このまま死んでしまうのか、なんとなく見上げた空は、どこまでも曇り、幻想的にちりほりとただ雪を降らしていた。

悲しくはない。死を悲しむのは何か心残りがある人間だ。自分は毎日好きなように寝て、好きなように食べて、好きなように遊んできた。そして好きなだけ愛された。

そこまで考えて、自分が死んだら泣いてくれそうな唯一の肉親を思い出した。自分が死んだら確実に泣いてくれるだろうその人をなだめる周りのことを考えると、すごい勢いで同情した。同時に、愛しさが溢れ出した。

「パパ」

会いたいよ、我慢した涙がとうとう流れてきた。同時に、固まっていた足が動き出した。チャンスだとばかりに、結は再び、ずぼず

ぼと歩き始めた。

無心に歩いていく中、ふとまばたきされると、地面が近くなつていた。また雪が深くなつたのか、嫌そうに足元を確認すると、叫びそうになつた。近づいてるのは自分、倒れてしまつ才前だつたらしい。

弱々しく周囲を見渡すと、前も後ろも右も左も真つ白で、ビのくらい歩いているのか、どこへ続いているのか分からぬ。もう嫌だ、結が意識を手放そうとしてしまつたそのときだつた。

人の声だ。

現金にも脳が覚醒した。思わず緩んだ表情で結が足を早めると、思わず歓喜で叫びそうになつた。空耳ではなかつた。

「あのお！」

よかつた助かつた、結が必死に声を絞り出すと、振り返つた男たちを見て、寒さ以外の理由で固まつてしまつた。

それはゲームかアニメでしか見たことないような、甲冑の騎士だつた。甲冑からはみ出す無精髭と着込んだ厚いジャケットがなんだか妙だつた。

彼らはこぢらに気づくなり、いきなり槍を突き出してきた。思わず結は両手を挙げた。

「何者だ！」

「このよつうな山にそのよつうな軽装で…ここは神聖なる山だぞ！」

「お前、どこの国の者だ！その肌の色、ここの人間ではないだろう…」

責め立てられ続け、どこから返事していいのか、男たちの迫力に結は戸惑つてしまつた。確かに言つことがいちいちもつともだ。こんな雪山でこんな格好をした子供が歩き回つていたのでは確かに不

審だらう。

「どこかいたりやつて説明したものが、焦りながらも体は律儀に寒さに震えた。」のままで、風邪ではすまない。

「あ、あの……話すとややこしいので、とりあえずかくまつてもらえませんか！？」

「何！？」

「見ての通り子供です！一人です！」がどこかも分かりません！死にそうです！寒いんです！助けて下さこー！」

もはやヤケで現状をぶちまけると、一瞬の静寂の後、男たちの馬鹿笑いがそこらに響き渡った。

「ではどうやつてここまで上つてきたというのだ！」

「子供が一人で……ては敵国のスペイカ！？」

ああもうそいつをの通りや、男たちの台詞がまたもつともで、結は先ほどとは違う理由でまた泣きたくなつてきた。

「怪しい奴め……引つ捕らえよー！」

「ああー！」

「はつ！」

捕まえられてしまうのか、思わず結は逃げようとしたが、そうだ、と思いついた。こんなところでつらづらしているより、彼らに捕まつてしまつた方が、とりあえずは助かりそうだ。

結が怖がるふりをしながら内心ほつとしていると、奥の男がいやらしく笑つて、顔を覗き込んできた。

「おい、こいつ女だぜ。しかも可愛いじゃねえか

「ちよつと小さいが、高値で売れるかもな」

売られる……

「冗談じゃない、思わず走りだそつとした結の腕を、男たちが慌てて掴んだ。

「おい逃げるだー！」

「取り逃がすな！籠持つてこい！」

「籠！？」

私はカブトムシか、必死に暴れるが、体力の損失と凍えと圧倒的な体格差で、全て無意味に終わつた。このままでは本当に売られてしまう、結が父親の名前を泣き叫ぼうとしたそのときだつた。

「わん！！」

現れたのは、父親でも、まさか白馬の王子様でもなかつた。まあ、なんというか犬だつた。どこからどう見ても犬だつた。黒一色で大きな犬は、尻尾を勇ましく振りながら、こちらに近づいてきた。

呆気にとられた結の頭上で、男たちがまた馬鹿笑いした。

「おい、見ろ！お犬様が助けにきてくれたぞ！」

「お前の犬か？」

「いや……知らないです」

思わず正直に告白した。あいにく犬は飼つてないし、もちろん知り合いもいない。ふと金属音に振り返ると、男の一人が槍を構えていた。

「そういうや最近犬鍋、食べてねえなあ」

こいつらの脳内には食べることと売ることしかないので、呆れてしまつた結が、犬に向かつて声を張り上げた。

「逃げて！」

助けにきてくれたかどうかも定かではないが、目の前で動物が殺されるのは気持ちのいいものではない。

すると犬は逃げるどころか、こちらに突進してきたかと思えば、あつという間に結の足の間に入り込んだ。要するに、乗せたのだ。

「は」

状況についていけず我ながら間抜けな声を漏らすと、犬はそのまま駆けだした。

「わ、わっ！」

「おい、犬とガキが逃げたぞ！」

「捕まえろ！！」

男たちが追いかけていくが、犬の足は風のように速く、結は振り落とされないように必死で犬の尻尾に捕まつた。

痛くないかと思わず犬を心配したか、彼（多分）はどんどん駆けていくため、結はありがたくも捕まつたままにしていた。そうしてしばらく走ると、崖っぷちだつた。まさかと思ったが、犬はためらいもなく飛び降りた。結を乗せたまま。

声なき声で叫び、結はとうとう意識を投げ出した。

人生の中で一番多く言われた台詞を上げてみると言われば。

「結ちゃんつて、変わってるね」

まず間違いなくこの台詞だろう。新学年に上がり新しい同級生が増える度にそう言われた。

気がついたら父しかいなかつた。兄弟も祖父も祖母もおらず、父と一人だけだつた。父の作るご飯は給食の100倍美味しかつたし、寝る前の父の話は教科書よりずっと面白くて、これ以上の家族の必要性など感じたことがなかつた。そんな父といふ時間を割いてまで、同級生と遊ぶ必要性も、もちろんだ。人形遊びや鬼ごっこ、ままごと電車ごっこ、あらゆる遊びが楽しいとは思えなかつた。

しかし現実はそう甘くなかつた。通信簿である。どんなに勉強が出来てもどれだけ足が速くても、友達がいなければ容赦なく、いかにも親が心配しそうな文章を書き立て、更に酷くなると家庭訪問まで来る。

0点取ろうが100点取ろうが基本的に反応が変わらない父も、さすがに目の前で担任女性が泣き出したときには慌てていた。

友達は必要だ、父が恥ずかしがらぬい為に。こう学んでしまった自分は、やっぱり可愛くないし、変わつているのだろう。

それからというのも不思議な話だが、友達は一人、また一人と増えた。子供の遊びも慣れてしまえば楽しかつたし、子供の話も聞いてみれば意外と面白かつた。始めて友達を泊まりに来させたとき、父の笑顔を見たとき、大きな仕事をやり遂げた気がして、私はたまらなく嬉しかつた。

小学六年生になつた。周りがどんどん大人っぽくなるのに対し、

自分は著しく成長が遅れているらしく、先日など四年生の輪の中に入れられそうになった。久々に、らしくもなく落ち込んだ。

そんな私を見て友人は気を使ってくれたのか、プールに連れてきてくれた。好きなだけ泳いで、並んでアイスを食べながら帰った。

ふいに、友達が遠くなつた。

呼んでも叫んでも友達は止まらなかつた。周りの人たちもどんどん先を行つていつた。止まつてゐるのは、私の方だった。

そして次にまばたきすると、一面銀世界だった。最初は何かの夢だと思ったが、凍てつく風と足元の雪の冷たさが、どうしようもないくらい現実だった。

寒い。寒いよ。

パパ、パパはどこ。

パパ、助けて…

「い…おい、大丈夫か？」
耳元で声がして、結はゆつくりと目を覚ました。最初に映つたのは白一色で、まだ雪山にいるのかと再び目を閉じたくなつたが、体を包む温もりと空氣の暖かさが、違うと言つてくれてゐるようだつた。

しっかりと目を開けてみると、低い天井と、畳の匂いと、一面銀世界の美しい庭が迎えてくれた。古いが丁寧に手入れされてある屋敷の中のようだつた。

雪山で歩き回つていたはずの自分がどうしてここにいるのか、そ
ういえば騎士の男たちに捕まりかけたような、そして何かに助けられ
たような…

「わんつ！」

威勢のいい鳴き声が聞こえた気がして、結は完全に目を覚ました。何があつたか思い出せた。そうだ、自分は犬に助けられたのだった。そして犬と崖から飛び降りた。

あちこち体が痛むから天国のわけないし、まさか犬小屋でもない、この屋敷の綺麗さからあの騎士たちの住処でもないだろ。あの男たちが住処をこんなに綺麗にできるとはとても思えない。

なら、一体「こはど」だらう。

結がゆっくりと顔を上げると、枕元で正座していた青年が微笑んだ。二十歳前後のいかにも人の良さそうな青年は、肩までの髪も優しい目も、着ている浴衣も全て美しい漆黒だった。

見覚えのない顔、が、少なくともあの騎士たちよりは信用できた。

「おはよう。どこか痛いところはないか？」

「…全部」

思わず正直に告白すると、男は思いきり笑ってくれた。

「そうか、全部か。そうかそうか。まあ、とりあえず生きててくれてよかつた。全然起きないから、もう駄目かと思った。とりあえずたくさん寝たから、後はたくさん食べて、傷を綺麗にしないとな。飯は今作らせてある。嫌いなものはあるか？」

「ピー・マン…」

は、最近攻略したが、どうもまだパプリカは苦手だ。前言撤回すべきかどうか迷っていると、青年は首をかしげた。

「聞いたことがないな…異国の料理か？まあ、とりあえず、そんな食べ物は入つてないぞ。聞いたことがないからな。よし、とりあえず体を拭ぐぞ」

そう言つと男が、よいしょと結を起き上がらせた。

「はい、ばんざい」

まるで幼子をあやすように青年が結のタンクトップをずるりと脱がせた。いくらか成長した胸が露わになり、思わず結は、あ、と呟いた。

少女のように叫んだのは、青年の方だった。

隅で小さくなり虫のようになに動かないで、結は思わず声をかけた。

「…あの、お気になさらず…私、まだ子供ですし…」

「…っ、いや、大変なことをしてしまった…まだ婿入り前なのに…！」

震える男の背中を見て、結はため息をついてしまった。どちらが男か分かつたものではない。結がもう一度何か声をかけようとするとき、男はいきなり回復したのか、こちらにやってきた。

「性別を確認せず、いきなり肌を見たことをまず詫びる。しかし俺はまだ未熟者だ、嫁はまだ取れない」

「いやいやいや」

どこから突つ込めばいいのか、ぱたぱた手を横に振つていて、盛大にくしゃみが出た。するとまた男は慌てて立ち上がった。

「ああ風邪を引いてしまうな…おい！着物！女物の着物だ！それから飯はまだか！？」

叫びながら男が出ていってしまい、結はまたため息をついた。忙しい人だ。

そういうえば、名前も聞いていない。あの犬の主人だろうか。といふか、そもそもここはどこだろう。もつといえば、今自分がいる“ここ”は日本なのか、地球なのか。

そんな壮大なことを心配しながら、律儀に腹の虫だけは鳴り続けていた。

それから間もなく、食事が運ばれてきた。運んできた女たちは見た目も年齢も様々だつたが、共通していることは全て薄紅色の着物を着ていること。すれ違う青年にいちいち満面の笑みを浮かべること。そして自分を睨みつけること。

どうも彼女たちは全員、青年に氣があるらしい。更に自分の存在が面白くないらしい。実に分かりやすい面々である。

運ばれてきた料理は見たことがないものばかりだつたらどうしようかと思つたら、大盛りのお粥と山菜の漬け物だつた。舌が和食に慣れている結は喜んでかきこんだ。

あまりの空腹であつという間に平らげると、青年が笑いながら戻つてきた。先ほどの女たちは一人もおらず、少しほつとした。

「それだけ食欲があれば十分だな。すぐに歩けるようになるだらう」

はて、骨折でもしたんだろうか、そつと自分の足を見ると、これでもかと包帯が巻かれ、今更ながら感じたことがない痛みが疼いた。「骨まではやられなかつたみたいだが、酷い凍傷だ。おまけに切り傷もすごいぞ。熱も大分下がつたが、まだ平熱じゃないしな」

「…あの…」

なかなか覚醒しない脳、異常に減つた腹、それは以前20時間昼寝したときの症状に似ていた。

「一体どれくらい寝ていたんですか？」

「ん？ 3日だ」

「3日！」

父を始めとした友人や先生たちの顔が忙しく脳を駆け巡るが、携帯が通じないことはとうに分かつていて、更にこの足ではどうし

ようもならないと、ゆっくりと諦めていった。

そして、3日もお世話になつたことに今頃気づいた。

「ええと… どうもありがとうございます」

自分の出来る限りで精一杯頭を下げるとき、向かいの青年も慌てる
ように頭を下げた。

「ああ、いいんだ。気にするな」

「わん！」

ふとまた耳の奥から犬の声が聞こえて、もう一人の恩人を思い出
した。

「あの…あの、真っ黒い犬は」

「え？」

「私を助けてくれた真っ黒い犬は…どこですか？あなたの犬です
か？」

「ああ。それは俺だ」

「は？」

話に全然ついていけない結が呆けていると、どれ、と青年が立ち
上がり、いきなりバク宙をした。すると、青年が大きな犬になつて
しまつた。思わず反射的に拍手をすると、犬が、わん、と大きく鳴
いた。

「さて」

犬の口から青年の声が聞こえてきた。こういつては悪いが、なん
だか間抜けだ。

「ずっと君と話したかったんだ。何から聞きたい」

「…ええと。それは、また、人に戻れるんですか？」

犬がきょとんとした顔をすると、器用にバク宙をした。するとま
た青年になつた。思わずまた拍手すると、彼は照れたように笑つた。

まだあちこち痛いので横になりながら青年の話を聞き始めた。彼はずつとどこか痛くないか、眠くないか、腹は減つてないかと連呼していく、信じてもらひつまでずいぶん時間がかかった。絵に描いたようないい人だ。

「俺の名前は九郎。冬の里の者だ」

「冬の里…？」

「ああ。この世界、世界つていうのも変な話だがな、春の里、夏の里、秋の里、冬の里と分かれているんだ。お前が今いるのは冬の里。ずっと冬なんだ。君がいた日本とは違つてな」

「日本を知つてゐるんですか？」

「知つてゐるも何も、日本に季節を提供しているのは俺たちんだぞ」

「へえ」

素直に感動し、素直に信じ込んだ。男の人柄が溢れるような声と話し方は、まるで父の昔話のように心地よく吸収されていった。

「私は…夏から來ました」

「はは、通りで…涼しい格好だったわけだ。災難だつたな。山で会つた連中を許してやつてくれ。最近、色々なことがありすぎてな。色々みんなカリカリしてゐるんだ」

「それは大丈夫です。あの」

「ん？」

「帰れるんでしょうか、私

ずっと迷つていたが一番聞かなくてはいけない問題、否定されることはわかりきつていたのに。彼なら一秒でも早く、家に帰そうとしてくれただろうから。

しばらく黙つた後、九郎は首を横に振つた。

「すまない、分からんんだ。君のよくな旅人の話は聞いたことがない」

「…そう、ですか」

きつと落ち込んでしまつたのだろう、慌てたよに九郎が笑つてくれた。

「けど、心配するな…いや、心配するなは言い過ぎか。帰すことを約束できないが、俺は、まあまあ偉いんだ。権力も財力も人手もある。いくらでも調べてやるからな。だから、だから泣くなよ」

「……………はい」

思わずそう返事をすると、また九郎が笑つてくれた。

「よかつた。そうだ、名前は。君をなんて呼んだらいい」

「結です」

「…美味そうな名前だな」

久々に言われた。軽く落ち込んだ結は、ふと、九郎の言葉と、庭の広さ、先ほどの女たちの多さに違和感を覚えた。一体この人はどれくらい偉いんだろう。

「あの…」職業は

なんだかお見合いみたいだ、質問すると九郎はちょっと嫌そうに、静かな声で言つた。

「王子」

まあまあ何も、ものすごく偉いんじゃないか。

自分は一体運がいいのか悪いのか、思わず頭を下げた結の向かいでまた九郎が頭を下げて、頭をぶつけ合つてしまつた。

九郎の屋敷に世話をになって更に数日、結の体力はすっかり戻った。起き上るのはもちろん、なんとか歩けるほどに回復した。

それを告げると九郎は散歩に連れていくてくれた。手を引かれることは正直恥ずかしかつたが、雪があまりに深い為、素直に甘えることにした。

九郎が歩くと、人々がみんな頭を下げた。いちいち頭を下げ返したり、手を振ったりしているのが印象的だった。

彼は毎日どこかに出かけては、夜になると帰ってきた。そして必ず、自分の手を引いて歩いては、美味しいお店に連れて行ってくれた。

最初に目を覚ました日以来、女たちは屋敷には来ない。広い屋敷に自分と九郎だけ。

すっかり歩け回れるほどに回復したある朝、あまりの洗濯物の多さと、台所の汚さに驚いた。勝手に片付けていいかどうかずいぶん迷つたが、一度見つてしまつたため、気がつけば皿を手に取つていた。

「やるか」

洗剤もない食器洗いは難航したが、なんとか綺麗に片付いた。今度は洗濯だ。文字通り山のような洗濯物を次から次に掘つていく。洗濯機は見あたらぬし、まさかコインランドリーがあるとも思えない。一体どうやって洗濯すればいいんだろう。

いくらか洗濯物を掘つていくと、大きな洗面器と洗濯板が顔を出した。

「…嘘お」

「ただいま」
「お帰りなやー」
あー疲れた、と上着を結に渡した九郎は、鼻をくんくんと動かした。

「なんかいい匂いがする」

「あ…夕飯を作つてみました」

「え！？」

大げさに驚いた九郎が、慌てたように台所へ走つていった。そして次に洗面所へ走つていき、忙しく走り回り、よつやくこちらへ戻ってきた。

「飯が出来てる！」

「はい」

「洗濯物が片付いてる！」

「はい」

やつぱり迷惑だつただろうか、九郎の顔を見上げると、彼は見たことがない顔をしていた。その驚いているよつな、喜んでいるよつな、悲しんでいるよつな。結がなんて声をかけていいか迷つていて、九郎の額が肩に乗つてきた。

「…り、がとう。ありがとう」

「…いいえ」

よかつた喜んでくれた、ほつと笑つた結の向かいで、顔を上げた九郎も笑つてくれていた。

「食べよう」

「はい」

「おかわり」

「はいはい」

返事も雑になつてきた、よく食べるなあ、と笑いも出てしまつた。

いつも食事処へ行つてはたくさん食べてはいるが、今日は特によく食べている。自分が作つたから気を利かせているかとも思ったが、こうもたくさん食べてくれては、そんな考えもどこかへ行つてしまつた。

綺麗に味噌汁を飲み終えた九郎が、両手を合わせた。

「ごちそうさまでした」

「いいえ」

お茶を淹れると、九郎は何度目か分からぬお礼を言つてくれた。
「全然王子らしくなくてびっくりしてるだろ?」

「…少し」

「だよな。俺もそう思う。俺、駄目だつたんだ。城で、たくさんの人間に囮まれて、朝から晩まで人がやつてくれるの。耐えられなかつたんだ。だから、飛び出した」

そこまで一気にしゃべると、九郎が少し照れたように頭をかいた。

「城に残つてたら、結にもつといいところで寝かせてやつたんだがな」

「そんな、十分です」

日本ではベッドだつたが、敷き布団も慣れてしまえば毎晩快適に熟睡していた。ホットカーべットもヒーターもないが、何枚も重ねた布団と七輪で、十分暖かい。

「そうか、ならいいけど…あ、そうだ。弁当は作れるか?」

「はい、大丈夫ですけど」

「よかつた。じゃあ明日頼めるか?城の奴らにお前のこと話したらさ、愛妻弁当作つてもらえつて言われたんだ」

お茶を、吹き飛ばすかと思つた。

「なんか知らんが美味そうだ。大丈夫か?」

「…頑張ります」

多分この人は、城ですごいからかわれているのだろうと、あまりの氣の毒だつたが、教えてやらない自分もまた大概だ。

「…はい、お弁当です」

「お、ありがとう!」

いそいそと嬉しそうに弁当を包む彼を見て、かなり良心が痛んだが、今更弁当の中身はどうしようもなかつた。

この世界の食材は日本と似ていることは助かつたが、あいにく自分はあの定番のハート柄の正体が何か分からなかつたため、鮭をつぶしてハートにまぶしてみた。おかげでできる限り可愛くしてみた。一体自分は何をしているのか、ともあれ、彼が望むなら、なんでもしてやる気にはなつていた。彼には感謝してもしきれない。

「じゃあ、いってくる」

「はい、いってらっしゃい」

それでも少しあやうすぎたかな、『めんなさい』と背中に向かって礼をすると、ふと彼が思い出したように帰つてきた。

「そうだ。今日は絶対に家から出るなよ」

「…? はい、分かりました」

疑問に感じながらも結が言われた通りに頷くと、九郎はにっこり笑い、髪をくしゃくしゃに撫で、元気に飛び出していった。

今日も寒いがいい天気だ、家中の窓を開け、結は大きく伸びをした。洗い物を片付け、洗濯物を干していく。毎日雨のよう振る雪の機嫌を伺いながら、干していく。ふと洗濯物の一枚が風に飛んでしまい、庭を出て、道へ出ていつてしまつた。

慌てた結が服を追つていくと、当然家から出た。

ふと九郎との約束を思い出し、思わず辺りを見渡すと、隣のおじいさんが挨拶してくれて、ほつと笑つた。何事もなく、家中へ戻らうとしたそのときだつた。

ふいに田の前が何か大きなものにふさがれた。それが槍だと分か

るまで、ずいぶん時間がかかった。

「止まれ！」

「何者だ！？」

振り返ると、やはりとか何とか何というか、甲冑の男たちが立っていた。いつかの雪山の男たちとは声が違つたが、そんなことは問題ではなかつた。恐怖がつま先から頭を走り、思わずへたり込むと、男たちが顔を覗き込んできた。

「やはりこの里の者ではないな」

「お前、どこの者だ。どこに住んでいる」

今ここで九郎の名前を出すのは躊躇つたが、それで自分の身に何かあつてはもつと叱られると自惚れられたのは、彼の優しさ故だ。

「九郎様の……屋敷に」

なんとか声を振り絞つてそう答えると、少しの沈黙の後、男たちは大笑いした。

「嘘をつくならもつとマシな嘘をついたらどうだ！」

「あの方がお前のような小娘相手にするものか！どのような美女が訪ねてきても、門前払いだつたというのに！」

「それは」

自分は別世界からやつてきて彼がたまたま拾つてきてくれただけだと、説明したくても、そんな勇氣はともに出なかつた。

それでも何かしゃべらうとすると、鼻先に槍の矛先が向けられた。死の恐怖を感じたのは、雪山以来だつた。

「おい、皮を禿げ！」

「はつ……」

「そこまですれば吐くだらう！」

冗談ではない、恐怖で声が出ないため周りを見渡してみるが、唯一の顔見知りのおじいさんはもうどこかへ行つてしまつたし、道行

く人たちも同情的な視線を送るだけで、我先にと逃げ出した。

「ことだつたんだ。九郎が案じてくれていたのはことだつたんだ。

ごめんなさい、見えない九郎に謝つてはいるが、目から涙が噴き出した。こんな形で彼と別れてしまつことが、死ぬより怖かつた。

「九郎様！」

思わず助けを泣き叫んでしまつと、ふと、新たな槍が現れた。

怪訝そうにその方向を睨み上げた男たちが振り返ると、慌てるようく頭を下げる。目に涙を溜めた結がなんとか顔を上げると、あまりの恐怖に涙が止まつた。

こんな。

こんな顔の恐ろしい男は見たことがなかつた。

「犬神様……！」

「犬神様！」

犬神と呼ばれるその男が歩く度に人々は頭を下げ、地面にひれ伏す者までいた。九郎のときもこうだつたが、雰囲気がまるで違う。頭を下げる人々の表情に親しみはなく、誰も彼も恐怖の表情を浮かべていた。犬神が通り過ぎていくと、皆が屋敷へと逃げるようになつていつた。

怯える兵士たちの前まで犬神が歩いてくると、結を見下ろした。あまりの恐怖に、結はただ彼を見上げることしかできなかつた。

年は三十前後くらいだろうか。九郎も長身寄りだつたが、彼はもつと高い。恐らく一メートル近くあるだろう。黒く美しい長い髪は後ろで一つにまとめ、黒い着物には鋭利な槍が何本も備えてあつた。美しい目鼻立ちが鷹のように鋭い目を余計に目立たせていた。

「何をしている

まるで地面の底から這い上がってきたような低く威圧感のある声に、兵士たちはまた震え上がつたが、一人が勇気を出したように一歩外へ出た。

「身元不明の子供を……発見致しまして。九郎様の屋敷に住んでい

るなどと戯れ言を申すものですから

「九郎君の？」

再び犬神から見下ろされ、結は思わず腰だけで、少しだけ後ろに引いた。尻が冷たいなんてもんじやないが、そんなこと言つてる場合じやなかつた。立ち上がりもしない。

正直九郎君、と少し親しげな呼び方にはっとしたが、彼が九郎の味方であるとは限らない。第一、九郎が今日家を出るなど言ったのは、この男が里に来るからではないだろうか。兵たちに関しては、九郎は少なくともかばっていた。

「それで？」

「…あの…少し拷問しようかと」

犬神が兵たちを睨み付け、彼らと一緒に結も怯えた。

「確かに里の者ではないようだが、九郎君の知人ではないという保証はない」

「しかし！」

「祭の前で警戒態勢も構わないが、君たちが九郎君の知人を傷つけたとあれば、国が潰しにかかるのは十分な理由だ。彼の立場を忘れたか」

兵たちが言葉に詰まり、頭を下げながら逃げるように消えていった。ひとまず助かったのか、いい加減威圧になれてきた結が立ち上がると、再び犬神と目が合つた。

「異人か」

それは異世界から来たということの意味だろう、少し迷つたが結は力強く頷いた。彼に嘘をつくのは得策ではないと思つたからだ。しかし瞬間、後悔した。彼の槍が、自分の首もとまでやってきたからだ。

「城まで来てもらおう」

「く…」

九郎様、の呼び声が喉から出かかつたそのときだった。

「わんわんわん！！

場違いな犬の声に、結は思わず表情が緩んだのを自覚した。大きな黒犬はやはり九郎で、こちらへ走つてくるなり、人間の姿に戻り、自分をかばうように強く抱いた。

「犬神さん、待つてくれ！こいつは俺が勝手に拾つたんだ！」

「…君が？」

「詳しいことは後日必ず話す！とりあえず今日は勘弁してやつてくれねえか？」

「なぜ、今、話せない」

「こいつ、風邪が治つたばかりなんだ。こんな寒いところにいたら、ぶりかえす」

「九郎君、君は」

「家族、なんだ」

今、九郎はどんな顔をして、こんな言葉を言つてくれたんだろう。顔が見られてなくてよかつた。涙が溢れて、止まらないから。

「…そうか、その子が…思つたより若いな。女兵に口説かれても應えなかつたのは、そういう趣向があつたからか」

「ばつ」

真つ赤になつた九郎を見て犬神は鼻で笑うと、そのまま去つていつていつた。そして少し離れたところで、もう一度振り返つた。

「明日、城へ連れてきなさい」

「城へ！？冗談じやない、何する気なんだ！」

「これは、命令だ。俺からではない。誰からか分かるな」

ぐ、と九郎が言葉に詰まり、そして犬神は今度こそ本当に去つていつた。それを見送ると、九郎はそのまま結を高く抱いて、自宅へと入つていつた。

「…あの」

何から詫びていいか分からぬ結はとりあえず声をかけてみるが、

九郎は答えない。怒つているのだから、約束を破ったのだ、もう捨てられるかもしない。

震える結がなんとか顔を上げようとすると、失敗した。抱きしめてくる九郎も、震えていたからだ。

「血の匂いがしない…よかつた、無事で」

「…九郎様」

「また、一人になるかと思った」

九郎の顔は見えないが、その震え方は泣いているようだった。父親から言われたことがある。男の涙を見るのは、ルール違反だと。その言葉がなくても、とても九郎の顔を見れたものではなかつた。胸元にしがみつくことに忙しかつたから。

仕事に戻らなくていいんだろうか、犬神から庇つたことにより彼の立場は危うくならないのだろうか、気になることはいくつもあつたが、どれも聞けなかつた。彼が側にいてくれることが、嫌になるくらい心強かつたからだ。

その日は、九郎が晩ご飯を作ってくれた。見た目も匂いも酷かつたが、驚くことに味は美味しかつた。一体何の料理か分からなかつたけど。

風呂の後、いいというのに九郎は髪を拭いてくれ、おまけに髪をとかしてくれた。恥ずかしかつたが、ここまでくればとことん甘えることにした。

「明日は城に連れていかなきやいけなくなつた…ごめんな。犬神さんの命令なら何とか逆らえそつなもんだが」

「いいえ、大丈夫です。九郎様と一緒になんでしょう?」

「 - ? もちろん」

「 だつたら無敵です」

そういうつて結が笑うと、九郎は照れたように頭をかいた。

「 いや俺は弱いぞ。犬神さんにだつて喧嘩で勝てたことないし…」

今日だつて

そこまで話すと、九郎は耳まで赤くなつた。

「 う… つ、 そうだ今日… ま、 まあいいやその話は。 疲れただろう。」

今日は、一緒に寝ようか

「 はい」

翌朝、朝一で城へと向かうことになった。城へ行くことに対する恐怖はあまりなかつたが、九郎に上等な着物を着せてもらうと、さすがに緊張してきた。

「いいか、俺から絶対離れるなよ」

「はい」

言われなくても離れられるわけがない。九郎の手をしつかり握り、馬車に揺られ、城へ着いた。そこは予想に反して、シンデレラでも踊つていそうな洋風の城だつた。城に入る前くらいから雪は止み、着込んだ着物が少し暑いくらいだつた。

歩く度に、兵士たちの頭が下がる。彼らの顔は皆無機質で、人形のようだつた。そこには親しみも愛情もなく、ただ九郎の肩書きのみに機械的に頭を下げていてようだつた。九郎がここを出た理由の100分の1くらいは、分かれたような気がした。

赤い絨毯が引かれた長い廊下をいくらか歩いていくと、今までの扉とは比べものにならないくらいの立派な金の扉が現れた。以前の九郎の部屋だろうかと思うと、どうも違つたようだ。繋いでいた手を払われ、九郎だけ兵に軽く抑えられた。

「これより先は、姫様だけに願います」

「何！？」

姫、とは自分のことらしい。兵に食らいつかんばかりに怒つた九郎の手を、結が慌てて少し引つぱつた。

「大丈夫です、一人で行けます」

扉の向こうに誰がいるのか、何があるのか検討もつかなかつたが、結は精一杯嘘をついた。このままでは例え九郎でも痛い目に合わさ

れてしまつかもしれない、と思つたからだ。

「けど」

「大丈夫です」

そう言つて強く言つて、重い扉が兵によつて開けられた。最後に九郎の顔が見えた気がしたが、あまり見ないよつにした。甘えてしまいそうだったから。

開かれた扉の向こには、植物園のようだつた。天井から床を囲むように花や草木がところ狭しと並べられ、蝶や鳥まで飛んでいた。暖かく眠気を誘われるよつな室温の中、テーブルでお茶を飲んでいる老婆がいた。何才か検討もつかないほどの皺の数だつたが、きちんと綺麗に身だしなみを整え、薄紅色の浴衣が美しかつた。

見渡す限り彼女しかいない、結が近くに行つておじぎをすると、老婆が微笑んだ。

「はじめまして。結と申します」

「あんたが…私は冬の里を守つてるもんだ。九郎の曾祖母でもある」

「そうそ…」

「ああ。ひいおばあちゃんつてことだよ」

「ひいおばあちゃん！」

思わずオウム返しに驚いてしまつと、彼女は豪快に笑つてくれた。その笑顔に笑い返し、結はもう一度お辞儀をした。

「九郎様にはいつもお世話に」

「そんな固い挨拶はいいから」

ふと。彼女が皺だらけの手で結の顔を包んでくれた。なぜだか、泣きそうになつた。

「あの子はね。かわいそうな子でね。兄弟も、親も、祖父祖母も、全部全部戦争で亡くしてしまつた」

戦争。学校の教科書でしか聞いたことがない話だが、急に目の前で九郎の広すぎる屋敷が広がって、妙にリアルになってしまったのだ。

「私とあの子だけが残った。私はもうこんな年だから、あの子に継いでほしかつたんだけどね。まあ、どうにしても私が死んだらあの子が王だけど」

「どうか、それで彼は王子なんだ。少し納得した結の目を見て、女王はまた笑ってくれた。

「いい目をしている。愛されてる目だ。わけの分からぬ世界に飛ばされて大変だろうが、あの子を愛してやつとくれ。あなたが愛されたように、してくれればいい」

「はい」

「いい子だ…さて。あなたの帰る方法だがね」

思わず強く反応した結を、女王は笑つて草場へ促した。会釈をして下に腰掛けると、彼女が眼鏡をかけ、大きな巻物を取り出した。

「世界を超えるなんて、すごい力さ。私でも想像できやしない。でも現にあなたはここにいる。世界を超える。そんなすごい力が働いたんだ。何か理由があるとは思わないかい？私はね、お姫様。あんたがその理由を到達するまで、帰れないんじゃないかと思うんだ」「理由…ですか」

「世界を超えるものは皆、理由がある。そして理由を見つけて、解決して、帰つていく。その理由が、祭りにあるかもしれない」

「お祭り？」

そういえばどこかで聞いた、女王が満足げに頷くと、また別の巻物を取り出した。

「九郎のこの世界のことは聞いたかね」

「はい」

「重複するかもしだれないが、夏秋冬それぞれの里にそれぞれの王がいる。冬は私さ。継ぐのは九郎、そうなると補佐は犬神になるだろうね」

先日の彼は九郎側の人間だったのだと、始めて知れた。しかし名前を言われると思わず震えが出てきたような気がして、『まかすように会話を探すと、小さな違和感に気づいた。

「春はいらっしゃらないんですか？」

「…行方不明だ。もう十年以上前になるかね」

慌てて謝ろうとすると、女王は両手を振つて制した。

「もう何年も前に死んだことになつちまつたが…といひが。あんたの世界には変わらず春が来る。違うかい？」

「ちやんと春は来てます」

「そだらう、そだらう。だからね、どつかで生きてると思うんだ。どこで何してるか知らないがね…だから、この時期になるとね、春の王を探すという名前で騒ぐのだ。春の王は、お祭りが大好きだったからね。去年もおととしも、出てきやしなかつたけど」

「そこで…私は何をお手伝いすればいいんですか？」

「そいつと女王は目を丸くして、また豪快に笑つた。

「さつきの話かい？私はね、あんたが春の王かもしれないと思つたんだよ」

「…ええ？」

少し遅れて驚くと、女王は手を叩いて笑つた。

「そしたら…まだまだ子供じゃないか。九郎より、うんと若い。むしろ、幼いね。あんた、今すぐ帰りたいかい？」

「いいえ」

我ながら感心してしまった。あの雪山のままだつたらそう答えていただろうが、今は違う。九郎がいて、守ってくれている。

その答えに、女王は満足げに頷いて、そしてビックリしょと言つながら立ち上がつた。慌てて立ち上がつて杖を支えると、彼女はありがとお、と言つてくれた。

「年寄りの長い話しなんて聞き流しとくれ。あるかどうか分からんが、理由は九郎と一緒に探せばいい。九郎と一緒にいてやつてお

くれ

「はい。私でよければ」

また笑つてくれた彼女から握手を求められ、しつかり握り返した。

ふと、扉の向こうから大きな音がした。大きな騒ぎ声が聞こえて、犬の声まで聞こえてきた。まさかと思って扉に近づくと、扉を頭で突き開けてきた黒い頭が見えた。もちろん、九郎である。

わんわんわん！！

九郎は犬の姿のまま吠え続け、次にまばたきする頃には、女王めがけて走つた。呆気にとられた結だが、止めようとしたそのとぎだつた。

しなやかな杖の動きで、九郎はひっくり返られ、尻餅を盛大に突いたときには、もう人の姿になつていて、涙目だった。結が思わず走つて近づくと、軽く抱きしめられた。

「いつてえ…つ、おい、ばばあ！結に妙なこと言つてないだろ？

な！？」

「誰がばばあだ、まったくいくつになつても落ち着かない…そんなに小さい嫁の方がしつかりしてゐるんじゃないか」

「…なつ」

姫からとうとう嫁になつてしまつた、九郎の顔色を何気なく伺うと、真つ赤になつてしまつていた。

「さあ、帰りな。嫁に風邪を引かせるんじゃないよ」

「言われなくとも…」

女王からさよならの代わりにウインクをもらい、会釈さえする暇もなく、また犬になつた九郎に、あつという間に外へ連れて行かれてしまつた。

犬の姿のまま、九郎は結を乗せたまま、黙々と歩いていく。何か声をかけようと思ったが、今は止めた方がよさそうだった。

廊下をそのまま進んでいくと、兵がぎょっとこちらを振り返ったが、それだけで何事もなかつたかのように会釈してすれ違つていつた。するとさすがに人間の姿に戻つた九郎が、結の手を引いてまた黙々と歩き始めた。少し痛い。

「……あの」

「……」

「怒つてもいいから、何かしゃべつてください」

自分は九郎の声が好きで、安心するのだ。思わずそう願つてしまふと、九郎はまた赤くなつていて。そしてそのまま、結の両肩を掴んだ。

「お前なあ！ひいばあちゃんに嫁つて言われても否定しないわ、愛妻弁当は作るわ……つ、そうだ、弁当だ！あれ嫁さんが作る弁当だつたんだよ！」

「……はい。」

「知つてたな、その反応は！教えるよ！」

照れたり怒つたりする九郎がおかしくて思わず笑つてしまふと、九郎がため息と一緒に顔を下げた。

「九郎様が望んでくれるのなら、何でも作ります。何にでもなります」

「だからつて……嫁は否定しろよ」

「しませんよ」

顔を上げた九郎は、少し驚いた顔をしていた。なんだかよく分からぬ照れがこみ上げてきたが、言葉は止まらなかつた。

「九郎様が嫌なら、次からは否定します」

「嫌なわけないから、困つてるんだろ？」

「じゃあ、否定しません」

「……でも結婚はもう少しでかくなつてから考えろ。俺よりいい男

は五万といるぞ」

「…そり、ですか？」

曖昧に、どころか疑問系の返事になってしまった。父親と結婚できなのは何年も前に諦めたとして、九郎よりいい男なんて、想像もつかない。

九郎に手を繋がれ長い廊下を歩いていくと、後ろから彼を呼ぶ声がした。少し面倒臭そうな顔をしたが、結の手を離し、目線を合わせるようにかがんだ。

「そこを右に曲がつたら黄色い扉がある。その中に入つてろ。すぐ帰つてくるから、絶対に出るんじゃないぞ」

「分かりました」

仕事の邪魔にならないように、結は頷いて素早く言われた通りの場所についた。黄色い扉を一応ノックすると返事はなく、失礼します、と入つた。

「…」
「…」
「…」
「…」

中には多数の先客がいた。埋め尽くされるように犬、犬、また犬。どれも真つ黒で、どれも犬になつた九郎に似ていた。なんというか圧巻だつた。失礼だが非常に獣臭い。

「おい、閉めろよ」

「寒いよ」

犬の口から人の言葉が発せられ、結が慌てて扉を閉めた。すると一番手前の犬が、結をじろりと見るなり、けたたましく吠えた。

「おい、こいつ、異人だぜ！」

「ほんとだ！」

「おい、誰か食つてみろ！」

またこんな展開か。結の脳内で逃げなさい、と警報が鳴るが、この部屋から出るなど約束したのだ。約束はそう何度も破つては意味

がない。

しかしこのまま食べられてもたまらない。九郎に助けを求めるのが一番の得策に思えたが、仕事の邪魔をするわけにはいかない。近く犬たちからの恐怖にじっと耐えていると、奥からだけ、と低い声がした。

その声に犬たちが道を開け、奥から、集団の中一回り大きい犬が歩いていきた。その鋭い目つきに、結は昨日の恐怖を思い出した。

「…犬神様？」

そう呼ぶと犬は大きく吠え、すると犬たちが全部外へ外へ逃げていってしまった。狼のように恐ろしい声だ。そして犬神かと思われる犬も、そのまま去つていってしまった。最後に、首から首輪のようなものを置いて。

恐る恐る拾うと、それは美しい鳥の羽の首輪だった。犬神の大切な物ではないのか、立ち上がり声をかけようとしたそのときだった。

足音が聞こえ、扉が開け放たれた。

「結」

九郎だ、結が思わず笑顔になると、彼は高く抱いて思い切り笑つてくれた。

「よかつた無事か…あいつらが城うろうろしてゐるからな。大丈夫だつたか？」

「はい、なんとか…そうだ。大きな犬が、これを置いておつたんですけど」

これ、と首輪を渡すと、九郎は目を丸くした。

「…大きな犬…そいつが、これをお前にくれたのか？」

「くれたというか…置いていったというか」

「じゃあ、くれたんだ。お前がもらつておけ。俺には必要がない

ものだから

部屋を出ると、九郎がいきなり、廊下を歩いてみると、と言い出した。九郎の手も九郎自身も離れてしまい、えつと驚いてしまった。すると九郎が先ほどの首輪を首にかけてくれると、軽く背中を押された。

言われた通りに恐る恐る歩いてみると、早速兵にすれ違った。思わずすくむと、なんと兵がお辞儀したのだ。結が呆けていると、次から次へ、すれ違う人がお辞儀していった。

「な、す、ご、い、だ、ら、う、そ、れ、い、い、も、の、も、ら、つ、た、な、」

「…これ…一体、なんなんですか？」

「この里では偉いです、つて物だ」

「…!返してきます!」

そういうと、九郎は声を上げて大笑いした。

その日は九郎が疲れただらう、と外食に連れてってくれた。食事処の人たちが、九郎だけではなく、自分にまで頭を下げて笑つてくれて、申し訳ないがそれ以上に嬉しかった。焼き豆腐と炒め物を九郎と食べていると、彼が急に真面目な顔になつた。

「祭の話し、ばあちゃんから聞いたか」

「はい」

「それにお前が参加することが提案された。これは、犬神さんの提案だ」

「犬神様の…」

「そうだ。ここはとにかく、よそのを嫌う。お前はそれでたくさん怖い目にあつただらうから、よく分かっていると思つ。すぐに殺そうとする、すぐに食べようとする。どうしてか、簡単だ。恐ろしいからだ。異なるものは、どんな力を持っているか分からない」

「そんな

首を思わず、横に強く振った。

「私は何もできません」

「分かってる。けど、それを分かろうとしない奴の方が多い。これはとにかく雪に囲まれ閉じ込められ、里のみんな全部家族みたいなもんだ。だから異なる者が入つてたら、警戒する。酷い時は殺してしまう。そこで誰も責めないんだ」

皆。皆が自分や周りを守りたくて必死なんだ。結が頷くと、九郎が酒を勧めてきたが、さすがに笑つて断つた。

「だから、お前が何も力がない無害な者だと分かれば、里の者が警戒を解く。生活はもちろん、元の世界に戻る方法も探しやすくなる」

「それを…犬神様が提案してくれたんですか？」

「あの人は顔は怖いけど、本当は女子供に優しいんだ」

九郎がそう言うのなら絶対そうなのだろう、悪いことをしてしまつた。ぎゅっと首輪を掴むと、九郎が頭を撫でてくれた。

「私は、何をすればいいんですか？」

「分からない。すまん、本当に分からんんだ。俺はお前の家族だからな。味方には教えられないんだろう。大丈夫。妙なことになつたら、絶対に助けるから」

「はい」

それなら大丈夫だ、ほつとしていると、奥から九郎を呼ぶ大声がした。

「王子様！こっちで飲もうぜ！」

「ああ？いや、でも今日は…」

九郎がこちらをちらりと見たので、結は慌てて立ち上がった。

「大丈夫です、一人で帰れます」

「けど」

「明るい道を通りますし、誰にもついていきません。家も鍵をかけます。外にも出ません。絶対に扉を開けません」

そこまで強く言つと、九郎は苦笑して、両手を挙げて降参した。

九郎の笑い声が聞こえて、少し嬉しくなった。考えたら、彼はずっと結に付き合ってくれていた。少しは自分の時間も欲しいだろう。

九郎に貸してもらったマフラーに埋もれながら歩いて帰っていると、こんばんは、こんばんは、すれ違う度に会釈され、慌てて返した。本当に大変なものをもらってしまった。

八百屋の前を通り、りんごをたくさんもらってしまった。丁重にお断りしたが、あまりに勧めるので、ありがたく持つて返った。甘そうなりんごが嬉しい。

「よし、お嬢ちゃん」

「一人かい？」

最近思つたのだが。自分は、ものすごく運が悪いのではないか。

田の前の男たちは、悪事が服を着て歩いているような、どこからどうみても悪者だった。悪そうに笑いながら自分を見下す、りんごの袋を取り上げてしまった。

「買い物かい？ 偉いねえ」

「お兄さんたちと遊ぼうよ」

やらしそうに笑い、男たちが一歩、また一歩と近づいてきた。かなり迷つたが仕方ながなく首輪を握つてみると、奥の男が小さく口笛を吹いた。

「おいおい冗談だろ？ ってことは、この小さいのが九郎の……」

「おい、お前。こいつの血を流してやれ。九郎を服従させるいい機会だ」

この男たちは兵の格好をしてないし、絶対に九郎の味方ではない。そう判断した結は、そのまま駆け足で逃げ出しだが、奥からの手に猫のように捕まってしまった。まだ輩がいたらしい。

「わて、じう傷つけよつかなあ」

「おい、何をやつとるかー」の愚か者供めーー

高らかな声に振り返ると、結はそのまま見入つてしまつた。年の頃は十五前後、すらりと伸びたよく日に焼けた長い足と、燃えるよう赤く長い髪が、足元の雪によく映えていた。全身派手な布を組み合わせたような服と装飾品が、人形のような美しい顔となぜかよく合つていた。

「おい、またガキが来たぞー！」

「お前の不倫相手か？」

男たちが馬鹿笑いした、その刹那だつた。

結を掴んでいた男は吹つ飛び、まばたきすると結は派手な布の胸元にいた。

何が起つたのか結はもちろん男たちも分かつてゐる様子はなく、何がなんだか、混乱した男たちは慌てるように剣を取つた。

「おい、やつちまえ！」

「そんな汚い顔で…僕に近寄るな！」

たくさんの風、また風、少年の手から産まれたたくさんの風で、悲鳴と共に男たちはあつと/or>間に飛んでいつてしまつた。開いた口がふさがらないとはまさにこのことだ。

「おい、大丈夫か」

「は、はい」

助けてもらつてしまつた。慌ててお辞儀をすると、指輪だらけの手が、結の顔を掴んだ。

「ふむ、なかなか美しいな。僕のところに嫁がせてやつてもいいぞ」

「…申し訳ありません。それは」

「む、なんだ、即答か。そんなに九郎がいいか？」

「そう、ですね」

自分は九郎がとても好きだ。それに…

「女人の人と、結婚できません」

少年、否少女が、真っ赤になつて、結から慌てて離れた。

「な、なななななな」

「…あ」

口調から、格好から、やはり秘密だったのか。謝ろうとするが、またすごい勢いで少女が戻ってきた。

「どうして分かつた！」

認めてくれた。どうしても何も、先ほど助けてくれたときの胸元の感触が、筋肉ではなかつたからだ。しかしそれを言つのは例え同性でも失礼な気がした。

「とても…お綺麗なので」

我ながら酷い言い訳だったが、他に思いつかなかつた。本当に、そう思つたから。そろそろと顔を上げると、少女はそれこそ本当に少年のように、悔しそうに頭をかきむしつた。

「あああもう、最悪だ！いいか、お前…つ、ええと」

「結です」

「そうだ、結だ！結、僕は絶対に女だと知られるわけにはいかないんだ。僕が女だつてばれたら…つ、僕はどうしたらいいのか…」
するとずつと強気だつた肩が小鳥のように震えだし、結が思わず手を握ると、そのまま、少女がその手を見つめた。

「誰にも…言わないでくれ

「分かりました。誰にも言いません」

「ありがとうございました。僕の名前は、一郎。家まで送る、そ

れぐらいさせてくれ

「ありがとうございます」

屋敷に戻り、一己と「りんご」をむいて食べていると、ほどなくして九郎が帰ってきた。

「ただいま！ 結、だいじょっ」

ぶ、が風に消えた。笑顔が固まつた九郎の視線の先には一己がいて、彼女もとても優しいとは言えない笑顔で立ち上がつた。

「よう九郎、息災のようだな」

「…っ、てめえ、山猿！！」

酷い呼び名に、結は思わずりんごを吹きそうになつた。九郎は女子に絶対そんなことは言わない。嘘は通じてるようだ。

「人ん家で何してんだよ！ 結に何した！」

「あの九郎様、一己さんは、私を助けてくれて」

「何？」

「そうだぞ、お前がへらへら遊んでいる間に、僕が助けてやつたのだ。危ないところだつたのだぞ。まあ、あいつらの気持ちも分からぬのではない……こんなに美しいのだからな。だから僕も求婚した」

「はあ！？」

一己に軽く抱きしめられながら、結は一人の様子をうかがつていた。挑発され、九郎はどんどん怒りで顔を赤くしていくのに対し、一己はすつと余裕そうに笑つていた。

「冗談じやない、結を離せ！」

「誰が。なあ、結。お前も冬より、夏が好きだよな？」

「え？」

「王子なんかより、王がいいよな。僕は、夏の里の王だぞ」

驚きすぎて声も出ないとは、このことだつた。

冬の王子の次は夏の王か、驚きすぎて魚のよう口をぱくぱくさせている結の前で、九郎たちの言い合いはますます白熱してきた。

「こいつなあ、俺の大事な家族なんだぞ！ 王だろうが何だろうが、こいつを簡単に嫁にやれるか！ 大体、てめえもこの子もまだ子供じやねえか！」

「はん、これだから時代の残党は…いいか、明日何があるか分からぬのだぞ？ そんなときに呑気にやれ子供だやれ早いだと言つてられるか。僕は後悔などしたくないのだ。僕は嫁にもらうと言つたらもうう。お前こそどうなんだ」

「何がだよ」

「結が本当に好きなのか？ 女に免疫がなさすぎて、一緒にいてくれるのなら誰でもいいのではないか？」

「お前つ

さすがに怒つて反論しようとした九郎が、ふと結と田が合つて、そのまま固まつた。今自分がどんな顔をしているのかは分からないが、九郎の様子からして普通の顔はしていらないらしい。

「…まあもう、いいから離れろ！ すぐに！ 兵を呼ぶぞ！」

「おーおー威勢のいいことだな。僕をビデオするつもりだ

「死罪」

「ええ！？」

驚いて声を上げてしまったのは結の方だった。いくらなんでも極刑すぎる、といふかやりすぎている。すると結を抱いたままの一己がけらけらと笑つた。

「僕を殺すのか？ そうなれば全面戦争だぞ」

「ああ上等だ！冬の底力なめんなよ…」

「あ、あのつ」

どこまで本氣か分からぬが、戦争は駄目だ。九郎が辛いことを思い出す。焦る結の前で、二人はまだ言い合っていた。もう早口すぎて口熱しすぎて何を言つてはいるのか分からぬといふまで進展してきた。どう止めようか焦つたそのときだつた。

「夜分に何の騒ぎだ…外まで簡抜けだぞ」

決して大きくはないが、鋭く厳しい声に、先ほどまで熱戦していた二人は嘘のように押し黙つた。まさかと思って顔を上げると、やはり犬神だつた。

「九郎君、いつまでも子供のように大声を出すな。君はいづれ冬を支配するのだろう」

「…つ、すんません」

「一己。君もいつまで冬にいるつもりだ。王族同士が簡単に謁見していくは、妙な噂を立てられても文句は言えない」

「は、はい」

あの一己が大人しく返事をし、正座までして、九郎も続いた。その様子に犬神は小さく頷き、そして大きな包みを取り出しつつ、結に差し出した。

「これを見たて祭に出なさい」

「わざわざ、ありがとうございます」

「ばば様からの命令だ」

ばば様とは王様のことだらうか、そつだ、と思つたように結が首輪を差し出した。

「あの、これ、ありがとうございました。とても助かりました。でも私には…」

ふ、と犬神と目が合つて、そのまま引き込まれた。もう恐怖は幾分減つたが、その代わりに、鋭さ以外の別の色も見えた。とても、

とても悲しい目。

そのまま目を見ていると、犬神は結に首輪を押しやり、そのまま帰つていつてしまつた。すると、やれやれと一己が正座を崩した。

「あのクソオヤジ」

「犬神さんを悪く言つな」

「…、ふん。まあ、いい。今日は帰る。祭には僕も出る。お前は朝から出なければならぬだろう、結は僕が迎えに行くから」

「ああ、そうしてくれ…玄関まで送る」

そう九郎が言つと一己はむつと少し赤くなり、結の手を強く引いた。

土産だと一己がどこから出したのか、色とりどりの果物を両手で抱えきれないほどくれた。ありがとうございます、とお礼を言つと、彼女はにっこり笑つて、頭をくしゃくしゃに撫でてくれた。

「お前は犬神と九郎、どちらが王にふさわしいと思つ?」

「…え?」

「本当はな、犬神がここに王になるはずだつたんだ」

知らなかつた事実に結が目を丸くすると、一己が小さくため息をついた。

「彼はその名前の通り、代々王族の血なんだよ。あの人は厳しいけどしつかりしている、対して九郎は優しすぎる。おまけに城も嫌つていた。誰もが継ぐのは犬神だと信じていた。けどばば様が指名したのは、九郎だつたんだ。犬神は言い返しもしなかつた。それどころか、喚く九郎をなだめていたんだ。僕は、王座に行こうともしなかつた犬神が理解できない」

「それは」

犬神にも犬神の事情があるんだつと、言いたくても言えなかつた。目の前に性別を偽つてまで、王をやつている一己がいるのだから。

「僕はこんな風だから、九郎と喧嘩しかできない。犬神にも逆らえない…身体検査でも万が一されたら大変だからな。だから、結。九郎に優しくできるお前が好きだよ」

「…一己様は」

九郎が好きなのか、と聞けなかつた。なんだか言い様がないような恐怖に負けて、聞けなかつた。

「ん？ 何？」

「いえ。あの、果物たくさんありがとうございました。帰り、気を付けて下さいね。雪がまた深くなつてるから」

「関係ないさ」

そういつた瞬間、一己が飛び上がると、そのまま大きな鳥になつて、空へ消えてしまつた。美しい難色にも連なる羽は、一己が着ていた服のようだつた。

「また会おう、結。祭の日を楽しみにしている」

「はい」

結が一己を玄関まで見送つたまま戻つてこない。気が氣でない九郎だったが、いつまでも待つているのもなんだか間抜けで、先に寝ていることにした。結の布団まで敷いてやり、ふと思い出したように湯浴みに向かつた。

寒いため長湯になつたが、まだ結の布団は空だつた。まさかまだ話してゐるのか、さすがに玄関に向かおうとした九郎が足を止めた。

そろそろと布団をめくると、熟睡した結が、九郎の布団の中にいた。こつちぢやないだろ、と笑つて九郎は小さな体を抱いて両目を閉じた。

翌朝、いつも通りの極寒と、布団の温もりと結の温もりが色々相乗し、九郎はすっかり寝坊してしまつた。結も同じだつた。

王子が城に出勤してこないため、犬神の命令で迎えに来た兵たちが扉をどんどん叩くが、熟睡した一人は目を覚ましもしない。

大分迷ったが、何より犬神が怖いため、兵の一人が失礼します、屋敷へ入った。前に来たときは王子相手に失礼を承知で思い出すが、とても汚く殺風景だつた。だが今はどうだらう。台所から異臭もないし、むしろ美味しそうな残り香までする。洗濯物は綺麗に片付き、掃除も行き届き、玄関には花まで飾つてあつた。

まるで新婚家庭にお邪魔したようだ、なんだかいたたまれない兵は、九郎の言葉で元気になつた。

「結はまだ12だぞ！まだ子供だ、嫁になんてするわけないだろう！」

まったくおっしゃる通りだ、自分は何を照れているんだろう。きっと九郎の寝室をぶち開けたところで、何も問題はない。

「九郎様！失礼します、ご出勤の時間に……」

目の前には、半裸と九郎と、その胸元にうずくまる結がいた。

一人が飛び起きたのは、すごい勢いで逃亡する兵の足音だつた。

着替えた九郎が馬車に乗り込み、兵たちも続いた。なんだか異常に空気が重い。九郎が嫌そうに顔を上げると、ある兵は目を反らし、ある兵は無理矢理に笑い、ある兵は平静を装つていたが妙にこめかみが揺れていた。

完全に誤解をされている、九郎が重いため息をついて、軽く拳手をした。

「あのなあ、俺は寝相が悪いんだ。着物ほとんど着崩れてる、別に結とは何も」

「……はっ！ 奥様なら」心配ありません、今、一己様がお屋敷に
「奥さんって言つなあ！」

その頃結はといえ、台所で寝ぼけながら皿を洗つていた。兵がいた氣がするし、なんだか九郎が妙に焦つていた氣がする。遅刻して怒られないだろうか、なんて大あくびしながら心配をしていた。お皿が片付いた頃、扉を何度か叩く音があつた。手を拭いて玄関まで走ると、頬もう、と元気な声がして、思わず笑つて扉を開けた。やはり一己だつた。

「おはよつゝござります」

「……」

「……己様？」

思わず顔を覗き込んでしまつた。なんだか、お通夜みたいな顔をしていて。何か声をかけようとしている、両肩を叩かれた。

「僕は……他人の色恋沙汰について何かいう趣味はないが……もう少し年齢を考えた付き合い方を」

「はい？」

「お母さん見て、鳥さん！」

「綺麗だねえ」

「あ、誰か乗つてゐる」

「いいなあ」

鳥になつた一己の背中に乗つて、結は里の上空を飛んでいた。怖がらないよう人に配慮してくれてるんだろう、あまり空高くは飛んでないため、注目の的になつていて。恥ずかしいが、それ以上に爽快だつた。しつかり捕まつた結を乗せて、一己はすつと笑つていた。

「そうか、そうか、ただ寝ていただけか。そんなことだらうと思

つた。僕は危うく九郎を殺すところだったぞ

「よかつた」

保健体育程度の知識ならあつたが、そういうことじぢからかといえば疎い結は、一己が何をそんなに心配しているのかよく分からなかつた。が、九郎の為に誤解は解いた方がいいことだけは分かつた。

「そうだ、そこに団子屋があるんだ。一緒に食べよう

「はい」

「おかわり!」

わんこそばのよつに「己は次々と団子をおかわりしていった。こんな細い体のどこにそんなに入るのか、店員がまた笑いながら団子を持ってくれた。

「彼氏よく食べるわねえ」

耳元でそう囁かれ、団子が詰まるかと思つた。みんなどうして男に見えてしまうんだろう。こんなにも美人なのに。

「そうだ、結。お前は異人だそうだな」

「はい」

「元の世界に帰れる宛てはあるのか?」

「いいえ、今のところ

「それでは…これから先、どうするのだ?」

「…そう、ですね

団子を置き、結が世界を見渡した。

始めは長い夢だと思っていた。しかし、夢はいつまで経つても終わる様子はない。それどころか、最近ではこちらの方が日常になつてしまつている。テレビも携帯もない、でも九郎や優しい人たちがいるこの寒い世界で、自分はどうなつていくんだろう。帰れるとしても、何年後になるのか、もしくは一生いる羽目になるかもしれないのだ。

「このままでは九郎の嫁にされるぞ」

「私は、構わないんですけど」

「どうか正直、願つたり叶つたりだ。でもそれでは、九郎の可能性を全部潰してしまう。忘れがちだがあの人は王子で、将来この里の中心になる人だ。自分はといえばついこの間まで別の世界の人間で、なおかつ子供だ。九郎の支えになんてとてもなれないし、何より甘えてばかりで、九郎を満足させる年齢にもまだまだならない。」

「でも、それは私の願いだから」

「…よし、働くか」

「は？」

働く、思いもしなかつた言葉に、一己はもつ決意してしまったようで、いきなり立ち上がった。

「今は女も働く時代だ。働けば少しは気が楽になるだらう、男の金だけで暮らしているから、悲観的になるのだ」

「は、はあ」

言つてることはまともだが、なんだか根本的に間違つてる気がする。すると一己はいきなり鳥になり、結を足から引き上げてしまつた。

「よし、就職活動に行くぞ！」

「え、ちょっと…」

空高く舞われ、結が必死で一己の首を掴むと、もつ地面が遠くなつていた。下では団子屋のおばちゃんが盛大に怒つてゐる。そういうえばお金はまだだつた。

食い逃げをしてしまつた、顔を青くする結をよそに、一己はすごい勢いでどこかへ飛んでいった。

ものす”に勢いで飛んでいく一己に必死でしがみつきながら、落ちないよう必死で氣を配つていううちに、あつといつ間に地面が近づいた。人間の姿に戻つた一己に肩を叩かれると、目を疑つた。目の前は、どう見ても冬の城だった。

「おい、行くぞ」

「ちよ、ちよつと」

焦る結の声も聞かず、一己はどんどん歩いていった。

「きなり子供」一人が城に乱入してきた為、兵どろか女たちまで飛び出してきたが、頭を下げるのもまた早かつた。一己は結の首輪を掲げるよう歩いていったのだ。しばらくそのまま歩いていくと、周りより良い服を着た女性が一人、頭を下げながら跪いた。

「失礼致します、一己様とお見受けします」

「そうだ。僕だ。お前、暇か。ちよつと話が

「申し訳ありません、女王様がお呼びで」

「ばあ様が！」

らしくもなく慌てた一己が、いくらか足を無意味に動かした後、しつかりと結の肩を掴んだ。

「では行かねばな…すまないな結。この詫びは必ず」

「いえ、そんな。大丈夫です、一人で帰れます」

「何を言つておるか」

ちよいちよいと女性を手で呼びつけた一己が、彼女にいくらか耳元で囁くと、元気に奥へ飛び出していつてしまつた。あの方向は確かに、女王様がいらっしゃった部屋だ。

帰ろうかどうか結が迷つていると、先ほどの女性が軽く手を握つ

てきた。

「ああ、どうぞいらっしゃりく」

「え？」

案内されたところは、よく片付けられた茶室だった。お茶やお菓子のいい匂いがする。先ほどたくさん団子を頂いたのでさすがにお菓子はいただけそつになかつたが、お茶は遠慮なく頂いた。とてもいい香りだ。

「さて、職を探されているとか」

「己が説明してくれていたのか、結は思わず姿勢を正した。

「九郎様の奥方でいらっしゃるのなら…失礼ながら、必要はないと思いますが。それともあの方は、豪遊されていらっしゃるのでしょうか？」

結は思わず強く横に首を振った。空想の中でしか知らない王子様たちは、考えられないくらい九郎の生活は普通だ。召使いは一人もない、屋敷には自分と九郎だけだ。穴の開いた靴下を履いてしまつていたこともあるし、外食だって庶民の居酒屋にしか行つていい。おまけにそれも、自分が自炊するようになつてからはめつり数も減つた。

「では、それでも働きたいと」

「…それは」

正直、働くというのは己の提案だ。しかし、考えてみた。この城で、何か出来ないだろうか。九郎を支えることが、少しでも。

「出来れば、働きたいです。ここで」

「失礼ですが、いくら大金を稼いでも、世界を渡ることなど不可能ですよ」

「それは…私は」

いきなり。いきなりさらしてしまつた世界。ありがとうむじ

めんなさいも言えなかつた。

たくさんさんの言葉を伝えに、戻りたい。でもそれは、きっと九郎たちと永遠に別れることになる。

「帰りたいのか…帰りたくないのかよく分かりません。けど、ここにいさせてもらつては以上は。九郎様のお役に立ちたいです」

「九郎様を好いていらっしゃるのですね」

「恋とかは…よく分かりません。すいません。けど、あの人役に立ちたいのは本当です」

「素直な子」

ふ、と溶けるように笑つてくれた女性が軽く長い前髪をかき分けると、息を飲みそうになつた。なんて酷い火傷の跡だらつ。すると次の瞬間にはもうそれは見えなくなつていて、慌てて平静を装つた。彼女は変わらず笑つていた。きっと、全てお見通しなのだらつ。

「私は九郎様の教師をやらせていただいたこともあります。だから、あの方の性格も少しは知つています。あなたがお金を稼いだところで受け取らない。違いますか？」

「それは…はい。そう思います」

「では、こうしましょう。お金の代わりに何か差し上げるということで。何か欲しいものは」

「醤油…！」

思わず叫んでしまつた結を見て女性は目を丸くして、さすがに少し恥ずかしくなつた。

「…っ、すいません…ちょうど、切れてしまつていて…」

すると、ほどなくして女性は声を上げて笑つた。

「姫様の料理は美味しいそうですからね…分かりました。食べ物や調味料、調理用具を対価にしましょ。そして世界を渡る手段がもし見つかれば、真つ先にあなたに知らせましょ」

「ありがとうございます」

「そう…得意は家事なんですね」

「ぱりぱりと本をめくり、彼女がため息をついた。

「駄目、ですね。調理場が定員一杯だわ。掃除婦も足りてない」

「そうですか」

「では…これはどうでしょう」

「はい」

「女王様を起こす係」

「は？」

思い切り失礼な返事を思わずしてしまったが、彼女は気にせず話を続けた。

「女王様の目覚めの悪さは筋金入りで…目覚まし十個あつてもお目覚めにならないのです」

「…それはそれは」

呆れを通り越して感心してしまひ。

「寝相も激しくて…いらっしゃつて…」の前も、おみ足を頂いた剣士が頭蓋骨を

「ええ!？」

「止めときましょうね、これは」

また失礼を承知だが、結は何度も頷いた。さすがに頭蓋骨は守りたい。

「では、兵はどうでしょう」

「兵、ですか」

「といつても、姫様を守りになど行かせては、私の首が飛んでしまいます。ある部屋の前で、立っているだけです。当然食事も出ますし、人もほとんど通りません。まず危険はありません。眠りさえしなければ、本を読んでも、何をしても構いませんわ

「それは…」

確かにそれは自分でも出来そうだが、いくらなんでも楽すぎやしないか。しかしせっかくの勧めだ、やるだけやつてみてもいいかもしない。

「その部屋を見せていただいてもいいですか？」

「ええ。もちろん」

部屋まで案内されている途中、若い兵たちが声を張り上げながら剣の訓練をしていた。中には自分くらいの子供もいて、思わず見入ってしまった。

「いざれ、あなたの兵になりますわ」

「そんな」

自分に兵なんてもつたいなすぎる、結がその場を去り立つとすると、兵たちが慌てて頭を下げた。

「姫様！」

「姫様！お疲れ様です！」

「馬鹿、お疲れ様ではおかしいだろ！」

子供の兵が頭を軽く殴られてしまい、結は思わず笑つてしまいそうになつた。厳しいだけの職場ではないらしい。

「あの、姫様。俺たち、姫様に憧れて」

「え？」

「たつた数日で九郎様の奥方になつたなんて…普通じゃない。一
体、どんな能力をお持ちなんですか？」

「九郎様は、恐ろしい獣に化けることができるとか」

今度は吹き出しそうになつた。可愛い、はさすがに失礼かもしないが、大きいけど犬に化けられることに、少し尾ひれが付いているらしい。

「奥様は何に化けられるのですか？」

「それとも、何か特別な力がおありなんですか？」

若い兵たちに興味深そうに近づかれ、結がたじろいでいると、女

性がぴしゃりと手を叩いた。

「止めなさい。姫様はお忙しいのです、さあ、行きまわよ」

「待て、小梅」

年長者の兵が顔を出し、女性が足を止めた。彼女は小梅といつらしい。

「わしも興味がある。彼女が一体、何なのか」

若い兵たちとは違い、彼の目は厳しく、どこか始めて会つたときの犬神に似ていた。自分を警戒するような目に、小梅は声を荒げた。

「いい加減になさい！姫様になんて無礼を」

「あそこに壺が見えるか、お姫様」

そういう兵の指先を追うと、遙か高い天井近くに大きな青い壺が見えた。

「あの壺を、ここに飛ばさせてくれねえか。俺たちじゃどうやっても届かなくてな」

「ちょっと！」

「できないのか。ばば様なら、これくらい寝てたつて出来るんだぞ。そんな。そんなことどうやっても出来るわけがない。でも。

「姫様！」

どうして自分は手をかざすんだろう、こんな両手をかざしたって

ぱあん！！

壺が、粉々に粉碎してしまった。中は酒だつたらしく、酒の匂いがその場に立ちこめた。

いくらか時間が経つと、兵たちは震え上がり、結に槍を向けた。あまりの出来事に固まつてしまつていた結だったが、刃先を見て更に動けなくなつた。

「ばばば化け物だ！」

「九郎様は、化け物に取り憑かれている！」

「……つ、控えなさい！！」

小梅が慌てるように、自分を高く抱いてくれた。体温が近いから、彼女の手が震えているのがよく分かつた。

「この方は、九郎様の奥方です！そのことを忘れたなどと言わせませんよ！このことは、ばば様に報告させていただきます！」

小梅はそう叫ぶと、兵たちを押しのけ、結を抱いたまま廊下を走つた。そして誰もいない廊下の奥までたどり着くと、彼女は酷い咳をした。それほど体が強くないのだろう、慌てた結を、小梅が強く抱きしめた。

「姫様」

「…はい」

「あれは、なんですか？」

「わかりません…手が、勝手に」

我ながら酷い言い訳だったが、他に言い様がなかつた。兵たちが怖くて手どころか指も動かなかつたのに。

「信じましょう」

「…信じてくださるんですか？」

「もちろん。私は九郎様の味方ですもの」

小梅は更に結を強く抱きしめながら、まるで物語を話すように、ゆっくりと結に話し始めた。

「今日はとりあえず帰りなさい。彼らは私が黙らせておきますから…いいですか。今日のことは、忘れてしまいなさい」

「…はい」

兵たちが籠で送ってくれるようだつたが、丁重に断つた。ふらつく足で里までたどり着く頃にはもう夜になつていて、屋敷はもう明かりがついていた。扉を何度も軽く叩くと、九郎が玄関まで走つてきて開けてくれた。

「結！よかつた、無事だつたか…」己の野郎が、お前と城ではぐれたとか抜かしやがるもんだか

九郎がふ、としゃべるのを止めた。自分の腹にしがみついてきたのを結と認知するまで、数秒かかってしまった。

「…屋敷に入ろう。風邪、引くから」

結が小さく頷くと、九郎は彼女を抱いたまま、屋敷へ入つていつた。

九郎には教えたくなかったが、他に話す相手も思いつかなかつた。今日あつたことを全部話した。九郎はじつと黙つて聞いてくれていた。

「私、今日の小梅さんの話しを聞いて思つたことがあるんです。この世界には世界を渡る手段なんてない、そんな力もない…だから。世界を渡る原因は私にあつたんじやないかつて。今まで気づかなかつただけで、私には力があるかもしれません。恐ろしい力が」

「…結。お前の世界には犬になれる人間がいたか？」

「…つ、え、いいえ」

「でもお前は、前も、今も、俺を信用してくれている。一度も怖がつたことがない。どうしてだ」

「それは」

恩人だから。お世話になつていてるから。
大好き、だから。

「九郎さんは、九郎さんです」

「俺も一緒だ。お前はお前だ。そうだろう」

ずっと我慢していた涙が溢れ出した。そのまま流していると、次のまばたきをする頃には、九郎の胸元にいた。

「大丈夫。俺も一緒に考えるから。考えるの、苦手だけどな。結の為なら頑張るよ。けど、結。一つ約束してくれ」

「はい」

「何があつたら、必ず俺を頼ってくれ。いいな。お前が来る前、俺がどう生活してたかなんて、もう思い出すことも出来ない」

「はい」

頷きながら、この為だつたらいいのにと思えた。この人の寂しさを埋めるためにこの世界に来た、それだけの為だつたらいいのに。

翌朝は、ものすごい犬の鳴き声に飛び起きた。すごい数だ、一匹や二匹ではないだろう。隣に寝ていた九郎から「あいつらに殺虫剤をまいてこい」と恐ろしい命令を受けたが、まさか承諾するわけにもいかず、厚手の着物を一枚羽織り、結は急ぎ外へ出た。

玄関の外はなんというか予想通りの光景だった。庭を敷き詰めるような犬、犬、また犬。その犬がやたら吠え続いているので、結が思わず両手を叩くと、犬たちはようやくこちらを向いて、黙つてくれた。

「姫！」

「姫様、おはようございます！お迎えに上がりました！」

人間の言葉と混じりながら聞こえてくる犬の鳴き声、結はたまらず両耳を塞いだ。

「お、お迎えですか？」

「そうです！お祭りです！」

「お祭り？」

そうだ、確かにそんな話しがあった。まさか今日なのか、と思わず驚いてしまった。九郎は何も言ってなかつたし、もちろん他の誰にも聞いていない。

「今日なのですか？」

「そう、急に今日になつたのです。五要様がお目覚めになられたので」

「……よう、様？」

「ああ、姫様はご存じないのか……秋の王様です」

「一年に一回しかお目覚めにならないんですよ」

「ええ！！」

思わず大声で驚いてしまった。それが本当ならすごい話だ、失礼だが健康よりもっと前の、生死を心配してしまつ。

「五要様は次はいつお田覓めになるか分かりません。夜には必ず丘へお越し下さい。姫様、夜までに風邪など召されないよう

「ありがとうございます」

思わず丁寧に頭を下げるが、あまりの異臭にむせてしまつた。大変失礼だが、よく乾いてない洗濯物の固まりのような匂いがする。

「…あの…皆さん。失礼なことを聞いてもいいですか？」

「え？」

「なんですか？」

「最後にお風呂に入つたのは…いつですか？」

ぴくり、と両耳を動かした犬たちが、お互いを嗅ぎ合い、そしてまた吠えたてた。

「おい、お前！臭いぞ！姫様がむせておられる！」

「そつちこそ臭い！そんなことで姫様がお守りできるのか！？」

お前だ、いやお前だ、ワンワン吠えながら醜く争い合う犬たちを見て、結は今まで一番大きい音で両手を叩いた。

「皆さん…ちょっとお時間いいですか？」

平和に一度寝していた九郎がやつと起きてきて、のそのそと居間へ向かつたが、結はいない。あれ、と玄関を覗いた。靴はある。洗濯か何かかと脱衣所を覗くと、九郎はそのまま足を止めた。
風呂を敷き詰めるような犬・まあ、自分の部下たちなのだが、それが次から次へ結により芋のよつに洗われている。結はといえば、着物をまくりあげ、腹が丸見えだつた。それも気づかぬくらい真剣な顔つきで犬を洗い続けている。

固まつてゐる九郎の元へ、すつきりした顔の犬が一匹近づいた。

「ああ、九郎様、おはようございます。姫様に洗つていただきま

した。どうですか？もう臭くないですか？」

「……お、おまつ、お前等！！」

ようやく我に返つた九郎が怒りで叫ぶと、犬たち、そして結がぎょっと彼を見た。

「何してんだ、結と風呂になんか入りやがつて！出でけー見るな見るな、結の腹を見るなー！」

「ぐ、九郎様…犬さんたち、お風呂に入つてなかつたみたいだから」

「俺も犬だ、ボケ！」

「ほつ」

九郎からの恐らく始めての罵倒に未来が少なからずショックを受けている後ろで、濡れた犬たちは必死で笑いをこらえていた。動物相手に嫉妬する上司は、失礼な話だが、大変滑稽だった。

九郎は完全にへそを曲げてしまい、口もろくに聞いてもらえないまま、結は犬たちにつれられて祭会場につれていかれた。割と大きめな犬が背中に乗せてくれた。道行く子供に「わんわん」と指さされてしまつたが、慣れてしまえば快適だつた。

「姫様、もう臭くはないですか？」

「だ、大丈夫です…なんか。すいません」

「いえ。いいのですよ。それにしても姫様、よくお似合いだ」

「そう、ですか？」

今着ている着物は、犬神から祭りのときに着なさいと渡されたものだ。美しい桜柄の着物が恥ずかしい。

「姫様、妙なことされそうになつたら、我々が守ります故

「あ…ありがとうござります」

「なんならば、今から間者を飛ばしますよ」

「いえいえいえ」

自分は普通だということを証明しに行くのに、それをやる前から

不正をしてしまつては元も子もない。それに……

自分の拳を、ぎゅっと握る。あの日から、なんだか自分の手が自分のものじゃないみたいだ。あの力は一体なんだつたんだろう。また、出たらどうなるんだろう。

ふ、と下を見ると、足を止めた犬たちが一斉にこちらを向いて、心配そうに小さくわんわん吠えていた。久しぶりに、声をあげて笑ってしまった。

犬たちとは感謝と供に一反別れ、会場へ行った。出店が並び、中央には高い舞台がある。自分がよく知っている祭と一緒に。中央へ歩いていくと、大きく手を振つていてくれている一「〇」が見えた。

「結！」

「一己様」

走つていくと、軽く抱きしめ、頭を撫でてくれた。

「すまないな、迎えに行けなくて。五要が急に起きるなどと抜かすから、用意に手間取つてしまつた。あいつ例年なら、あと一週間くらい寝てるのに」

「本当に一年お休みされてるんですね……一己様、気になさらないで下さい。お忙しいんですから」

「お前は本当にいい子だなあ、九郎にもつたいな……ん？ そうだ、九郎はどうした。もう着いていい頃だろ？」

「それが……怒らせてしまつたみたいで」

「は？」

「口も聞いてくれなくて」

なんだか話しが始めるに本當に悲しくなつてきた、沈んだ結の向かいで、一己は慌てた。

「し、心配するな。な。あいつはああこうやつだから、時間が経

てばまた、へりへり笑つてゐるや』

「…はい」

一己の気遣いには嬉しかつたが、素直に心から笑えなかつた。一己が九郎のことを語ると、どうしようもなく悲しくなる。その距離と時間の差に。

今日は雪もなく、絵に描いたような快晴だつた。昼頃になると眩しいくらいで、一己は頭に巻いている美しい布を、結の頭に巻いてくれた。彼女が買つてくれたリングコアメと一緒に食べながら、二人で出店を見て回つていた。すると、ふと広場に出た。そこではたくさんの中たちが笑いながら、壺に向かつて手をかざしていた。

「なんだ? 何をやつている

「ん…あ、こ、これは一己様! いや、実は、城で、手をかざすだけ壺を割つた奴がいる、などと噂がありまして」

「それで、道行く輩が試しているのです」

「なんだそれは」

軽く笑う一己の隣で、結は体温が下がるのを自覚した。自分のこととまでは分かつてないようだが、知られてしまつていて。

「よければ、一己様も」

「僕はそんな面妖な力はないぞ…ほら!」

一己が手をかざすと、壺は宙へ跳んだ。それでもすごい力だ、周りの男たちが拍手する中、ふと誰かが結を見た。

「おや、そちらは?」

思わず一己の後ろに隠れそうになつたが、そつなる前にかばつよう抱いてくれたのは彼女だつた。

「僕の友達だ。なんでもない」

「そう、言わずに」

「そら」

勧められると、手がまた勝手に動き、結は喉の奥で小さく叫んだ。

まだ。また勝手に割つてしまつ。震える手を必死に挙げまいとあらがつていると、ふと一己が反応した。

「くせ者ーー！」

「ぱんーー！」

一己が剣を投げると、右脇にあつた出店の一部が壊されてしまった。すると、明らかに黒い影が消えてしまった。今、そこで誰かいただようだ。壺を囮んでいた男たちが我先へと逃げだし、店の者もさすがに怒つたようだが、一己を認知するなりすくみあがつた。

一己はそのまま剣も拾わず、結の手を引いて、早足で人気のないところまで歩いた。小走りでついていった結の両肩を掴んだ彼女の顔は、今まで見た中で一番真剣な顔つきをしていた。

「いいか結。落ち着いてよく聞け」

「はいーー」

「お前を…お前を、操つてる者がいる」

「え？」

「誰か分からぬ。検討もつかない。けど、これだけは言える。お前に力があるように見せようとしている奴がいる。どうしてそんなことがしたいのか分からぬけど…」

そこまでしゃべつて、一己は深く頭を下げた。

「すまない。僕は聞いてしまつたんだ。お前が城で壺を割つたこと。だから、もしかしてと思っていたけど…お前に力があると、皆の前で証明したい奴がいる。辞退しろ、結。九郎の妻のお前ならどうにでもなる。嫌な予感しかしない」

「でも」

「…ここに、いたか」

空気が変わり、思わず顔を上げると、そこにいたのは犬神だった。

犬に化けた犬神の背中に乗せられ、結は丘を駆けていた。どこに向かうのか、聞きたくても聞けなかつた。彼の緊張がこぢらにも伝わってきたから。

「ここなら、誰もいまい」

「え？」

祭り会場からずいぶん離れた野原で、人間の姿に戻つた犬神が、手のひらほどの大きさの水晶を渡してきた。美しい紫の色だつた。

「今すぐしまいなさい」

言われたとおり胸元にしまいこむと、彼は満足げに小さく頷いた。

「何かあつたら、それを口に含め」

「これは…なんですか？」

「願いが叶う、と噂のものだ。実際、願いが叶つた者はいないがな…いもしない神へ祈るしかないなど、腑抜けにも程がある。君を守る方法が思いつかない」

「犬神様…」

「嫌な予感が当たつたようだ。君は、恐らく、さらし者にされる。力があつてもなくとも。ろくな処罰を受けないだらう。力がないときは九郎の屋敷から放り出され、力があるときは春の王に命じられるだらう」

「私が…ですか？」

「上の連中は焦つているんだ。君という、異人に。だから、九郎君の見合い話も急に上がつてきた」

見合い、という言葉に思わず目を白黒してしまつた。聞いていい、そんな権利ないかもしれないけど。

「もちろん、会いもしないのに断つた。上は恐れている。冬の王子の九郎君は君を慕い、ばば様もそうだ、そして夏の王も…秋の王さえも、お前を気にかけている。お前が神になるのを、恐れているんだ」

「神、つて」

「昔、いたんだ。春夏秋冬、全てを統べ、そして全ての力を操る

者が。しかし、そいつのおかげで戦争が起じた

「神様を…奪いあつたんですか」

「君は察しがいいな…その通りだ。力がないものは、その持てる力精一杯で生きようとする。しかし目の前に圧倒的な力を見せつけられれば、恐れ、そしていざれ欲してしまう。そんなくだらないことの為に戦争は起こつたのだ。だから私は神など信じない。だが、君のことは信じられる」

「信じてくれるんですか?」

「そうだ。世界を渡る機会があつたら、すぐに帰りなさい。祭りでは、何が起こるか分からない。君がこの世界に来た理由が九郎君にあるなら、もう君は十分九郎君の寂しさを埋めてくれた。君が望めば、きっといつでも世界を渡れるかもしれない」

「私を…この世界に呼んでくれたのは、犬神様ですか?」

少し目を見開いた犬神の、口端が少し上がった。笑つてくれた。

「そんな力があつたら、九郎君を悲しませなかつただろうな」

「…つ、すいません」

「いや、構わない」

「犬神様、私なら大丈夫です。せつかく犬神様が作つてくれた機会ですから…頑張ります。信じてくれない人たちはたくさんいるかもしれませんけど、信じてくれている人たちもたくさんいるから。だから、大丈夫です」

「君は本当に…つ」

一瞬だつた。剣が飛んできて、叫ぶより早く、犬神の胸元にかばうように抱かれ、声が出なくなつた。少しほだけた犬神の胸元から、無数の刀傷が視界に飛び込んできた。きっと彼も、戦争で大切な人たちをたくさん失つたのだろう。

「よう、犬神。一年ぶりだな」

知らない声に振り返ると、男が立っていた。年の頃は九郎と同じくらいだろう。短い橙の髪は美しく、葉色の着物から出る四肢は白く細く、中性的な顔立ちで、性別を疑つてしまうほどだった。

「五要か」

秋の王様の名前だ、結が慌てて頭を下げようとするが、犬神が制した。

「あんたが冬の姫様か…へえ、可愛いけど、小せえな。九郎もうどう脳みそまで凍つたか？」

「彼女を愚弄することは許さん。貴様、一体何が目的だ」

「ああ？ 何の話だ」

「彼女を操り、壺を割らせたのはお前だろう」

驚いて五要を見ると、彼は大口を開けて大笑いした。

「そうだ、俺だよ。こいつをなあ、神にしたてあげて、処刑してやろうと思つたんだ。あいつと同じようにしてやろうと思つたんだよ。さんざん利用され、奪われ、最後、戦争の原因だと抜かして処刑されちまつた」

「…つ、酷い」

心から漏れた言葉が、思わず口から出てしまった。神様だつて、望まれて力を手に入れたわけでもないだろうに。

「酷い？ 本当に酷いのは九郎だぜ、お姫様」

「おい、止める！」

「神はな、俺の妹だつたんだ：あの馬鹿が、九郎に惚れやがつて…そんであいつは、妹の告白を断りやがつた。あいつは落ち込んで、そのまま無抵抗で処刑所に連れて行かれたんだよ！ あいつの力なら、兵全員焼き殺すくらい、わけなかつたのに！」

いつか、パパに聞いたことがある。戦争なんて、起こつてしまえ

ば大変な被害をもたらすけれど、原因なんて、ほんとに小さなことだつて。そして終わりも、本当にあつけないものだつて。

九郎から、そして恐らく犬神から、この優しい世界から、大切なものを奪つていった戦争は、たつた一人の女の子が原因で始まつてしまつて、そして、彼女を犠牲にして終わつていつたんだ。

「…犬神様、九郎様は、その話は…」

「知つてゐる…だが、知らないふりをしている」

「え？」

「あの子は、周りから氣を使われ、嘘をつかれ、何も気づかないふりをして笑つてゐるまま、時間が止まつてゐるんだ」

ふいに、九郎に会いたくなつた。彼は、どんな思いで城を飛び出したんだろう。どんな思いで、あの広い屋敷に一人でいたのだろう。

「九郎様…」

私は、あなたの寂しさや痛みの少しでも、埋められることが出来ましたか。

ふいに結に呼ばれた氣がして、九郎が顔を上げるが、まさかと自分で笑つた。もう彼女なら祭り会場のはずだ、声がここまで聞こえるわけがない。

「さて」

いい加減に行くか、と立ち上がつた九郎の腰には、父の形見の剣があつた。

曾祖母も祖父母も厳しかつたが、父親は次元が違つた。絶対的な威儀と圧力で、城を、そして母を支配していた。優しい母が大好きだつたから、当然父親は嫌いだつた。だが戦争が始まり、剣が母に向かつて飛んでくると、身を挺して守つたのは父だつた。そして母

は二日三晩泣き崩れ、眠るよつて亡くなつた。まるで父を追つよつに。

夫婦の絆など、それよりももつと前に愛など、分かるわけがなかつた。身を挺して守るくらい愛しているのなら、どうして普段から優しくできなかつたのだろう。どうしてあんなに虐げられた男のために、あんなに狂つたように泣けるのだろう。

恋も愛も分からぬ。分からぬから、当然、彼女の想いは断つた。だが、結果どうだ。彼女は殺され、五要は悲しみのあまり自ら眠りの呪いをかぶつた。悪夢のような戦争はあつといつ間に終わり、この世界から神を奪う原因を作つた自分はお咎めがないどころか、よく生きていてくれたと感謝さえされた。

もう、誰かを愛する必要性を感じなかつた。もう、誰も一緒にいよつと思わなかつた。なのに。

「九郎様」

どうして君を見つけてしまつたんだろう。どうして君の中に見つてしまつたんだろう。

いい加減自分の気持ちに自覚した九郎は、覚悟を決めて屋敷の扉を開けた。

彼女は世界を渡つてきたのだ、いざれは帰るのだろう。そしてその時は、すぐそこに来ている。聞こえるはずのない音が聞こえる。これはきっと、彼女を帰す刻限の音だろう。

それならば、伝えなければならぬ言葉がある。父の愛も、母の愛も理解できなかつた。そしてどうとつ、自分の愛も理解できないまま、別れことになりそうだ。自分には、結に世界を捨ててまで、俺と一緒にいるなんて、言つ勇氣だけは湧きそうになかつたから。まさか自分がこんな臆病でかつこつけな恋心を抱くなんて、思つてなかつた。そしてこれからも理解することはないだろう。

「よし」

気合いを入れて庭に出ると、呼んでもいないのに大量の部下たちが待っていて、またやかましくワンワン吠えていた。もう笑うしかなかった。

「その子を渡せ！」

「誰が渡すか！」

激しく剣が行き交う中、犬神にかばわれながら、結は必死でこの場をどうしたらいいのか考えていた。しかし悩んでも悩んでも、名案どころか案一つ出てこなかつた。早くしないと、どちらかが傷ついてしまつ。焦る結の耳に、杖の音が聞こえてきた。

「いい加減にしないか、この悪ガキ供……！」

現れたのは冬の女王様だつた。彼女は現れるなり、杖で思い切り二人の頭を殴りつけた。すごい轟音だつた。実際ものすごく痛かつたのだろう、犬神が頭を震える手で押さえつけ、五要是涙ぐんでしまつた。

「うつてえなあ、ばあちゃん！まだ生きてたのかよ！」

「ああ、生きてるさ私は。もちろん九郎もね。あんたみたいに夢ばつか見てないで、ちゃんと現実を生きてるよ。悲しいけど、笑つて、生きてるよ。この子を愛してる」

「だけど、あいつは

「いい加減にしな！」

そういうて女王が怒鳴りつけると、ほどなくして五要是子供のように大泣きし始めた。慌てた結が思わず駆け寄ると、彼はなんとすがるように抱きついてきた。

「まったく滅多に起きないもんだから、今、精神年齢いくつなんだい……ほらー姫にこめんなさいはしたのかい！」

「「」「めんなさい」

「…い、いえ」

状況が状況でなければ笑つてしまいそうだ。やれやれとため息をついた女王が、今度はうずくまつていてる犬神の腰をぴしゃりと叩いた。

「ほら、あんたもいつまで痛がつていいんだい。図体ばかりでかくなつて情けない」

「…つ、頭蓋骨を割つたかと思つたぞ」

女王の前では犬神も敵わないようだ、もう我慢できなくて声をあげて笑つた結に、女王の笑い声が続いた。

しばらくそうして笑つていると、結から離れた五要が、そろそろと片手を上げた。

「…ばあちゃん、もう一個謝ることがあるんだけど」

「ん？なんだい」

「…んじやつた」

「は？なんだい？よく聞こえないよ」

「だから…龍。呼んじやつた」

一瞬の静寂の後。

「「はあ！？」」

女王の声と、珍しい犬神の驚く声が綺麗に重なつた。龍とはいきなりファンタジーな話だな、などと呑気に呆けた未来が事の重大さに気づくのは、すぐ後のことだった。

「…つ、ひぐ、ぐすつ…」

「…あ、あの…もう泣かないで下さい」

「う、うるせえやー」

言いながら涙が止まらない狐の背中で、結は困り果てていた。実

はというかなんというか、これは五要が化けた姿なのである。大きな犬や、大きな鳥の背中ならそれほど抵抗はなかつたが、狐の背中となるとさすがに乗つているのが申し訳なくなる。おまけに泣いているし。

「あの、私、歩けますから」

「駄目だ、ばあちゃんの命令は絶対だ」

「じゃあ、私が降りたかったって、言いますから。大丈夫ですよ」「駄目だ！ ばあちゃんは怖いんだぞ、お前、殴られたことがあるか！？」

「… それは、ないんですけど…」

恐ろしき女王の威厳、そして怪力である。あの犬神がしばらく動けなくなるくらいだ、きっと相当痛いのだろう。

丘を降りて祭り会場に近づき、出店が見えてきた頃、とうとう五要は圧縮したように潰れてしまい、結が慌てて飛び降りた。

「もつ… もう駄目だあ」

「大丈夫ですか！？」

どうしよう、慌てた結がある出店に気づき、そのまま走つていつてしまつた。おいどこへ行く、と声も出ない五要が、次にまばたきをすると、お皿を持つている結が見えた。

「よかつたら… 叩し上がりませんか？」

「え？」

ぴん、と耳を立てた五要が皿を覗き込むと、それはもち巾着からもちを抜いた・要するに油揚げだつた。

「少しば元気になつたら、いいかと思つて」

氣まずいくらいの静寂があり、結は頭を下げるしかなかつた。狐に油揚げは安直すぎただろうか。

すると五要是いきなり立ち上がり、すごい勢いで油揚げを食いつてしまい、あまりの食いつきぶりに皿まで破つてしまつた。

呆気にとられた結の頬を、狐の舌が勢いよく舐めた。

「お、おまつ… お前、いい奴だなあ！」

「あ…よかつた、お気に召して」

「おかわり！」

「は、はいっ」

慌てて再びおでん屋に走った結は、笑顔になつた五要に笑い返した。なんでも食べててくれる九郎だが、特に肉が好きなため、まさかと思った予感は当たつてくれたようだつた。そうなるとまさか一己は虫が好物なのだろうかと、失礼ながら背筋が寒くなつた。

結局おでん屋さんから大量の油揚げを頂く形になってしまった。店のおじさんも最後の方になると、結の顔を見ただけで苦笑してもち巾着からもちを抜いて、そつと渡してくれた。

またお店に借金を作ってしまった、なんだか非常に申し訳ない結の横で、五要是呑気にひたすら食べていた。そしてようやく落ち着いたらしく、大きく息を吐いて地面に腰かけた。

「なんだ、元気がないな」

「い、いえ別に」

「分かつたぞ、金の心配だろ。俺が女に払わせるわけないじゃねえか」

そう言つて五要是笑い、おもむろに地面にあつた葉っぱを掴むと、それは次の瞬間にはお札になつていた。日本昔話のような光景に、結は思わず息を飲んだ。さすがは狐、とこうべきだらうが。

「よし、これで払つてこい」

「いえ、でもこれ…その、葉っぱじゃ」

「何？俺はいつもこれで買い物しているぞ」

「ええ！？ だつ、駄目です…！」

思わず普通に叱つてしまつと、後悔で赤面してしまつ前に、五要是大きく笑つた。

満腹になつたのだろう、五要是椅子の上で大あくびをした。彼の隣で、結はいつまでもここにいてもいいのか少し迷つたが、せしあたつて問題も見あたらないので、真似て隣に腰掛けた。

「眠くてたまらん… 今回は一年寝てないからな。こんなことは始めてだ。お前が世界を渡ってきて、時間の流れがおかしくなつたか

もしけないな

「あ…すいません」

「馬鹿。お前に会えてよかつたと言つてんじゃねえか」

そう言つと五要是少し赤くなり、結はその表情にそのまま見入ってしまった。今そんなことを言われた気は全くしなかつたが、謝るのもおかしいだろうし、お礼を言うのはもつと妙な気がした。要するになんと返答していいものか分からなかつたのだ。

結がそのまま困つていると、五要が先に口を開いた。

「俺の寝室は、冬の城にあるんだ。秋は治安があまりよくないからな、呑気に一年も寝ていられない」

「そうなんですか」

「小梅という女を知つてゐるか」

記憶を辿り、結はあつと声を出しそうになつた。自分を雇つてくれようとした、そして自分を守つてくれた女性だ。

「あいつは俺の寝室をいつも綺麗にしてくれてるんだが…俺の夢の中に、先日手紙を送つてきた。もうすぐ、新しい人が入つてくるかもしだせんよつて。なんでも、小さくて、可愛くて、料理が美味いらしい」

自分のことだと分かるまで、ずいぶん時間がかかつてしまつた。

「まるで妹みたいだと喜んだが…悲しかつた。けど、実際会つてみたら。楽しいかもしないと思つた。年に一度起きたとき最初に会うのは、そいつでいいかもしないと思つた」

結は小さく微笑んだ。それはとても光榮なことだ。しかし、胸の中のどうしようもない寂しさが消えなかつた。

「私の父親、一日に三時間しか寝ないんですよ

「は？」

唐突な話題に五要是戸惑つていたが、結は話を続けた。

「もちろん、眠そくにしてます。残業が続いた日は死にそつだつ

て…それでも頑固に、三時間しか寝ないんです。酷い日なんて、二時間ちょっと」

「…やあ、やんぎょうとこうのはよく分からないが…何やら大変そうだな。どうしてそこまでして、起きてるんだ」

「もつたいないんですって。やりたいことが多すぎて、寝ている時間が」

そこまで話すと、五要は明らかに怒ったようだった。ある程度予想は出来ていたから、結は特別驚かなかつた。

「何が言いたい」

「一年に一度しか起きないことは、100年生きたとしても、100日しか生きられないってことでしょう。そんなの」

「お前に何が分かる…」

そう叫ぶと五要是腰元の剣先を結に向けた。結は動かなかつた。震えが出ないようにするのに、ただ必死だつた。

「お前は…なんだ、お前は！父親に愛され、一からに来て九郎に大事にされ…よほど楽しいだらうな人生は。眠るのがもつたいいだろうな。だが、俺は違う！俺は妹を殺された！世界に裏切られた！起きていたつて楽しいことなんて」

「でも、生きてますよね」

「…え？」

「死を選ばなかつたんですね」

「…それはつ」

からん、と五要の手元から剣が落ちた。結がそつと拾う。よく手入れされている、美しい剣だつた。きっと小梅が丁寧に磨いているんだろう。

「笑えばいい。俺は、妹を追えなかつた。寂しかつたけど…怖かつたんだ。死ぬのが」

「笑いませんよ。私も例え、父親が死んでも、きっと後を追えま

せん

「それは九郎でもか？」

「そんなことをしたら、天国でうんと叱られてします。口を聞いてくれないかもしません」

「違いない」

そう言って五要が少し笑うと、また、泣き始めた。そつと近づくと、すがりつくように抱きしめられた。背は当然五要の方がずっと高いが、まるで小さい少年を慰めているようだつた。

「明日…明日、また起きたい。お前を連れて行きたいところがあるんだ」

「よかつた」

結が笑うと、五要の抱きしめる力が強くなつた。

五要を救えたとは思えない。だが少なくとも、彼にはもつと毎日をしつかり生きてほしかつた。生意氣だと蔑まれても、

無駄な日々など少しもないと、教えてくれたのはこの世界だつたから。

五要と出店を回つてこると、ふと向こうから大きな声が聞こえてきた。

「あ――――――」

何事かと振り返ると、一己がすい顔で走つてくるなり、げんこつを作つた。

「貴様、五要一起くるなり、姫を攫つとは何事だ…今日こそ殴つてやる！」

そう言って一己が手を回し始めると、結が慌てて五要をかばつようには彼の前に立つた。

「あの…いじめないであげてください」

「はあ…？」

「結」

彼は感動したような顔で逃げ込むように結の背中に引っ込んでしまい、一己はどんどん怒りで顔が赤くなっていた。

「結、騙されるな！こいつはずるいんだぞ、何せ狐だからな！僕もこいつの悪戯にどれだけ苦しめられたことか…」

「一己は単純だから

「何！？」

もう止まりそうにない一己と、結を必死で縋にする五要、二人に押し合われ、結は今にも突つ張つて伸びきりそうだった。

三人がそうしてもみあつていると、向こうから大きく鐘を叩く音がした。

「大変だ、龍だ！龍が出たぞ！…」

「…龍だと！？」

そうだ、そういえばそんな話を五要がしていた。何事が分かつていない結の隣で、一己はらしくもなく責ざめていった。

鳥に変身した一己の背中に乗り、結は祭会場近くの湖上空まで飛んできていた。見下ろす湖は人々が騒ぎながら囲み、そしてその中心には、冗談のような大きさの蛇・否。

「…龍」

あまりの恐怖に結は落ちないように、必死で一己の首もとを掴んでしまった。彼女は特に痛がる様子もなく、ただ結の恐怖と一緒にいてくれていた。

キャラクターもの等で当然見たことはあったが、そんなものとは次元が違った。角、目、口、あご、髪、そして体。あらゆるもののが巨大すぎて、こんなに遠くにいるのに今にも飲み込まれそうだった。それが湖の中でうねり、ひたすら人々を威嚇している。その度に入々は叫んだり怯えたりするが、龍は湖から上がつては来ないため、野次馬が減る様子はなかつた。

ふと知っている声の姿を探すと、犬神が声を荒げて野次馬たちを制していたが、彼だけではどうにもならなかつた。周りを囲むように九郎の部下の犬たちも吠えたてるが、龍に夢中の民に、その声は届かなかつた。

そういえば五要はどうなつたのだろう、と視線だけで探すと、木の陰に狐を見つけた。また、泣きそうにしている気がする。その姿に一己も気づいたのだろう、大きく舌を打つた。

「あの馬鹿、龍なんか呼びやがつて…！」

「五要様、どうして」

「あいつはいつも考えなしのガキなんだ、年上なんて絶対認めないぞ…僕はあいつのそういうところが嫌いだ」

そう一己が吐き捨てるど、ふと彼女が喉の奥で大きく叫んだ。彼女の視線を追うと、結も叫びそうになつた。野次馬の中の子供たちが、なんと龍に向かつて石を投げていた。

「馬鹿！」

「一己様！」

それから、全ての情景がゆっくりだつた。自分を乗せたまま一己が突つ込むより早く、龍は子供たちの方へ頭を動かした。彼らが泣き叫ぶより早く、一己が子供たちををかばおうとするが、彼女の体を突き飛ばし、龍に捕まつてしまつたのは、自分だつた。

「結…！」

きつと近くにいてくれているのに、一己の声が妙に遠い。ああそ
うかかばつたんだと、まるで他人事のように、情報のように吸収され、そして理解した。

「結！結！今助けるぞ…」

「止めなさい！」

駆けつけてきた犬神が一己をかばうように抱くと、彼女は泣き叫

んだ。

「結！嫌だ…結ーー！」

返事が出来ない。どうしたんだらう。目も開かない。死んでしまつたんだろうか。

いや、きっと違う。世界が、こんなにも暖かい。

まるで長い眠りから覚めたように結が目を開けると、すぐに状況を飲み込めなかつた。自分は宙に浮いていて、龍の鼻先がすぐそこにあつた。

龍は何をするでもなく、ただじっと結を見つめていた。その大きな、そしてどこか寂しそうな目はどこかで見たことがあつた。

「姫様を守れ！」

ようやく脳が覚醒すると、犬たちが跳びながら、大量の火の粉を飛ばしていた。龍は水の中に逃げながらも、巨大すぎる肉体は火の粉を全て避けきれなかつた。痛みに鳴きながら、それでも龍は、結から目を反らさなかつた。

「やめっ」

ふと龍を傷つけられるのをなぜか阻止しなければいけない気がして、叫ぼうとするが、声が出せなかつた。龍をかばつて、一体どうするつもりなんだろう。

結が迷つていると、今度は大量の弓矢が飛んできた。犬神が、姫に当たらないように、と叫んでいるが、目標が大きすぎるためそれは難しいことではなかつた。ついには血まで吹き出してきた龍は、水の中に逃げながら、それでもやはり、全て避けきれないようだつた。

ふと、結は、ずっと感じていた違和感によつやく気づいた。自分

が知っている龍と徹底的に違うもの。

「…あなた、もしかして、飛べないの？」

すると龍の目元から大量に水しぶきが溢れた。それが湖の水ではなく、涙だとなぜか絶対の自信があった。どうしてこの龍と始めて会った気がしないんだろう。

「俺は違う！俺は妹を殺された！世界に裏切られた！」

「そうだ、五要と似ているんだ。五要の目と、涙と、似ているんだ。もしかして、予感に結の背筋が凍りそうになつた。しかし聞かないわけにはいけなかつた。」

「ふと導かれるように、丘の上を見つめた。するとそこは、処刑場に見えた。きっとあそこで神様は殺されてしまったんだ。もう、聞かない理由はなかつた。」

「そこに…いるんですか？」

龍は、答えない。

「五要様の妹さんの…神様」

ただ、龍は泣いていた。

「なんだつて？」

結の声が聞こえた五要が、信じられない、と言つた様子で龍の背中を見た。当然顔も見えない。しかし、都合のいい幻覚かもしけないが、その背中が、一瞬妹に見えた気がした。

「…聞いたことがある」

「犬神が現れたが、五要は去ることもなく、じつと彼の話を見た。

「強い魂は、完全に消えることはなく、水や大地に溶け込むことがあると」

「強い…冗談じゃない！あいつはただの女の子だったんだ、なのに、神とか、天才とか勝手に盛り上がりやがって…！」

泣き出した五要の肩を、犬神がそっと叩いた。そして彼は静かに焦っていた。先ほどまでは龍を焼き払ってでも結を助ける気でいたが、今はそんな考えは消えてしまった。五要の前で、そして恐らく気づいているだろう結の前で、焼き払うことなどどうしてくれる。

「私も甘いな」

そういうて自嘲して、そして、五要にも気づかないくらい小さな声で、犬神は胸元の傷に向かつて小さくすまん、と呟いた。

「攻撃を止めて下さい…私なら大丈夫」

「やめなさい。

声が耳の奥から聞こえてきた。優しい少女の声だった。神様の声だとすぐに分かつた。

「…」めんなさい。あなたを呼んだのは、私です。

「…え？」

世界を狂わせれば、私も眠れるかと思つたのです。けど結果、あなたが迷い込む、それだけで終わってしまった。私はただ、自分が眠りたかつただけなのに、あなたを巻き込んでしまった。

「…そんな、どうして」

「私がいたら、また、戦争が起こりてしまうから。涙が、我慢できなかつた。

到着するなり騒ぎに駆けつけ、高台に上がり、九郎は声が出なかつた。信じられない光景だつた。龍が湖に浮かび、そしてその前で結が浮かされている。無傷のようだが、泣いていることでもう十分

だつた。

「結！」

どうしてお前が一人で泣いているんだ、声を張り上げると、結が顔を上げた。

「九郎様！」

思わず結が両手を伸ばすと、彼は吸い込まれるように呼び寄せられ、そして彼女を抱きしめることができた。

そしてそのまま剣を抜こうとすると、結がその手を止めた。

「止めて下さい…龍の中に、神様の魂がいらっしゃるんです」

「…つ、何言つてるんだ、そんなわけ…」

「九郎様。

少女の声に、驚きすぎた九郎の顔は、少し緩んでしまったくらいだつた。

「冗談だろ？…」

しかし龍の目をいくらか見据え、九郎はようやく納得したように、剣を鞘に収めた。

「いつかは…すまないことをした」

すると、龍が首を大きく横に振つた。もう彼女の魂と同化してしまつてゐるようだつた。

「重ね重ねすまないが…俺は、この子が好きだ。恋とかよく分からぬいけど、彼女より大事な子が現れるなんて、想像が出来ない」

突然の告白に結は驚きが隠せなかつた。そして、頬が恥ずかしくなるくらい熱くなつていくのが分かつた。

ふと大きな音に振り返ると、また弓矢が飛んできていた。結が叫ぶより早く、九郎が全て剣で落としてくれた。

「止めろ！…」

彼の威儀のある怒声に弓矢は静まり、あれだけ威勢良く火の粉を飛ばしていた犬たちも大人しくなつた。

「遅いぞ、たわけ！」

目に涙を浮かべた一己に睨まれ、九郎は詫びもせず、もつ笑うしかなかつた。本当に、遅すぎたから。助けにくることも、気持ちを伝えることも、何もかも。

「おい、五要のボケんだらー。」

「ほつ

罵倒に少なからず怒つたが、それでも素直に呼ばれるまま、五要が顔を出した。

「どうせ龍を呼び出しこのまま、お前だらつーさつさと封印しちまえ！」

「あ…ああー任せてくれ

一瞬だつた。遠くから飛んできた大砲に、龍の首が一閃された。

流れ落ちるように龍が倒れ、そして、九郎と結も巻き込まれた。血まみれになつて動かない龍から逃れられるわけもなく、一人はゆっくりと湖に沈んでいった。

目を覚ますと、岸辺に打ち上げられていた。ずいぶん流されたのだろう、祭会場が遠い。立ち上がって九郎を探すと、彼は倒れていた。青ざめて動かない彼に、す、つと体温が下がつていくのが分かつた。彼の頭上で飛んでいる青い光から、しづくが落ちていた。それは少女の声をしていて、ずっと泣きながら謝つていた。

「泣かないで…」

泣かないで。この状況を現実だと思いたくないから。

自分でも驚くほど冷静だつた。ゆっくりと両膝から崩れ落ち、そして九郎の脈を確認した。そして、もう戻つてこない彼の顔をじつと眺めた。涙も、悲しむ言葉も出なかつた。

「…いき、返らせないんですか？」

そして。

「神様なんでしょう!？」

自分で驚くほどの酷いことを言ってしまったと後悔した瞬間、涙が溢れ出し、そして叫んだ。涙は止まらなかつた。しばらくそうしていると、青い光がゆっくりと飛んできた。

「一つだけ方法があります」

「何ですか?」

「犠牲を払えば…魂を救えます」

「…それは」

つまり自分が死ねば九郎が助かるのか、単純明快だつた。だがそれは、できないことだつた。そんなことは絶対にしてはならないことだと、さつき五要に説明したばかりだつた。

「この世界での魂を消しましよう。そして、向こうの魂へと還りましよう」

「え?」

「わあ、すぐに還らなければ。本当に九郎様が天国へ行つてしまいますが」

「… そうか、そういうことか。そういうことにしてくれたのか。泣きながら笑つた結は、覚悟を決めて立ち上がつた。

「お礼は言いませんよ」

「分かっています。恋敵ですかね」

そう言つて青い魂が光ると、結の足元がまるで砂になつたようにどんどんつま先から消えていった。下から消えていくものだから、声はいつまでも耳に届いた。一己や、犬神の声も聞こえる。きっと五要も来てくれているのだひつ。

何も言わずに帰ること、きっと怒られるだろつたと感じた。けど申し訳ないが、もう、その怒りさえ幸せすぎて、笑顔にしかならなかつた。

胸元まで消えていくと、ぴくり、と九郎の腕が動いた。こんなに安堵したことはなかつた。

そつと顔に近づくと、顔がどんどん消えてしまった手前、唇が鼻にしか届かなかつた。生意氣にも、彼の唇まで届かなかつたことを、残念に思つてしまつた。

まばたきをすると、現實に帰つていた。時間は自分がプールに行つた翌日になつていて、友達も、もちろん父親も、世界も何もかも、自分がいた世界と相違なかつた。全てが夢だつたのではないかと疑いもしたが、胸元の水晶が違うのだと教えてくれていた。

毎晩水晶を握りながら、九郎たちのことを考えていた。そして、会いたいと水晶に吹き込まないようにするのに必死だつた。自分が戻れば、九郎の魂がまた消えてしまふかも知れないから。

今日も相変わらず暑い、向こつは今日も寒いんだろうな、なんて、最近笑えるようにはなつてきた。でもきっとまた、どこかでみんなに会えたら、何より彼に会えたら、きっとまた泣くのだろう。

「じゃあパパ、いつてきます」

「ああ、いつてらつしゃい」

「わん！わんわんわん！」

ほら。泣いた。

「…つ、九郎様！」

「げ、ばれたか！犬のふりしてようと思つたのにー。」

「分かりますよ…何万匹いたつて」

そしてきつと言つから。あの日の返事を。

「九郎様」

世界を超えて、何度も、何度も。

fin

最後はやたらと重くなってしまったが、もう切るといいのがなかつたので。

お疲れ様でした。そして読んで下つて本当にありがとうございました。

また何かしら書くかもしれませんが、そのときはまた笑つて、読んで下されば光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0965n/>

飛べない神様

2010年10月11日16時04分発行